
ビューティフル

まめご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビューティフル

【Nコード】

N66210

【作者名】

まめご

【あらすじ】

ごく普通、ごく平凡な日常を送ってきた木村初音の前に現れたのは、身長20cmの小さなお侍だった。

「可愛いくない」現代女子と、時空を超えて現代にタイムスリップ（限定ミニマム）してきた戦国武将のラブストーリー。

TIINAMIより転載作品、一部改稿。

プロローグ

その日、いつものように木村初音^{きむらはつね}は、蒲団に潜り込んで、静かな寝息を立てていた。

どこにでもあるようなワンルームマンションの一室は、豆球の橙色の灯りが灯っているだけだ。

日常の一幕。

夜が過ぎればケータイの目覚ましに起こされて、仕事に行く、本当に普遍的な日常の一幕。

全てをぶち壊したのは、男の声だった。

「おい」

初音は気が付かない。

「そこな女。起きろ」

「うー…」

あたし、テレビ点けっぱなしにしたっけ…。

いや、部屋の中は暗い。

空耳か。

寝返りをうつて再びまどろみの中に落ちようとした瞬間、背中にチクリとした痛みが走った。

何？ ダニ？

「起きろと言っているのだ、この化け物！」

空耳じゃない、不審者だ！

がばりと初音は飛び起きた。

しかし、部屋の中には誰もいなかった。

外で車の通り過ぎる音が聞こえるだけだ。

「なんだ、夢か…」

「夢か、とはわしが言いたい、ここはどこじゃー！」

怒鳴り声にしては小さい。それに姿が見えない。

「あ？」

取りあえず、電気を付けてみた。

「おお！？」

「ぎゃあ！！」

双方、同時に叫んだ。

一方は眩しさに、一方は枕横にいる不思議な生物に。

初音の目に飛び込んできたものは、ちょんまげ姿の侍だった。
身長約20センチ、ちよどりカちゃんサイズの小さな侍がそこにいた。

初音と直隆

売り場の片隅で初音は深いため息をついた。

目頭を押さえると、瞼の裏がチ力チ力する。完全に寝不足だった。

「店長？大丈夫ですか」

部下の林田が心配そうにやってくる。

「売り上げが悪いからって、そう落ち込まないで下さいよ。ぼくらもがんばりますから。ね？」

気を使ってくれるのは有り難いが、残念ながらその事実が初音の胃袋をキリキリと刺した。

「ありがとう。じゃ、がんばってもらおうかな、林田君。ペルーノ売ってちょうだい」

壁面に、ドンと鎮座する抽象画（畳一枚分の大きさで、訳の分からん渦巻が描かれている。お値段税込42万円）を差すと、林田は年の割には幼い顔を引き攣らせてエヘへと笑ってごまかした。

初音は老舗百貨店日本橋山中屋の一角、絵画売り場で働いている。2年前に店長に抜擢された。認めてもらえた、と天にも昇った気持ちには速攻に叩き潰された。責任者とは、その名の通り責任を負うものである。

不景気だから売り上げが落ちた、客が来ないから売れない。そんなことは言い訳にもならない。本社は数字しか見ない。

衣食住とは違い絵なんてなくても生きていける。生活に潤いを与える物は嗜好品に過ぎず、生活が苦しくなれば真っ先に排除される。それでも仕事だから、売らなければならない。青白吐息の中、手を変え品を変え必死に頑張っても予算の半分しか満たない月も多々あった。

同期は皆、結婚して辞めていった。

「初音も早く、結婚しちゃいなよ。いいよう子供って」

母となった彼女らはそう言って、お世辞にも可愛いとはいえない赤ん坊を愛おしそうにあやす。

「そうしたいのは山々なんだけどね。相手がね。」

あたしはちゃんと笑えているだろうか、と不安になりながら、茶化すように答える。

内心は醜い感情でドロドロだというのに。

仕事を辞めてしまいたい。無神経な幸せに浸ってしまいたい。でもなんだかそれは逃げている気がする。

だから初音は戦っている。逃げずに繰り返される日常と。

そこに突如として現れたのが、松本四朗直隆ことチビ侍だった。

あれはもしかしたら神さまがくれた贈り物かもしれない。

いやー、それだったら等身大の男がよかったなあ。イケメンで金持ちの。

「そのままの君が好きだよ（はあと）」とかほざかれて、苦勞一つない夢の世界にレッツ突入！……やばい、思考回路が崩壊している。

苦笑して髪を掻き上げる。テコ入れでもしようかと、壁面にかかっている絵たちを外しにかかった。

「あ、手伝います」

林田も慌てたように手を伸ばした。

松本四朗直隆は、今現在ぼつねんと巨大な台の上に座っている。奇妙な台で、四方からは蒲団らしきものが伸びていた。

「あたし、仕事があるから。お腹がすいたらこれ食べて。じゃ、行ってきます」

そう言って巨大女は出て行った。

今、自分はどこにいるのだろう。あの女の言う仕事とは何をしているのだろう。

直隆には分からないことだらけだった。

分かったのは自分が住んでいた所とは全く異なる場所というだけだ。そしてこの体が小さくなってしまったこと。

昨夜、ほとんど気が狂ったように直隆と巨大女は怒鳴りあった。ここはどこだの日本だの、あんたは誰だのお前こそ誰だの、どうしてそんなにかいだのそっちがちびなんじゃないのだの。双方混乱していたのだろう。

落ち着いて話そうか、と意見が一致したときは、二人とも肩で息をしていた。

「お茶、飲む？」

「もらおう」

茶があるとはそれなりの家に違いない。直隆は内心大層驚いたが、女は大きな箱を開けると、竹筒よりも一回り大きなけったいな物を取り出した。

「ん」

巨大女の茶碗はやはり巨大で、まるで甕かめのようだ。

苦労して一口飲んだ直隆はその茶のうまさと冷たさに再び驚いた。喉を鳴らして、あつという間に飲み干してしまった。

「喉かわいてたの？」

女は微笑んで、お代わりを継いでくれた。

笑うと結構かわいいではないか。ちらりとよぎった感情を慌てて散らす。

女は木村初音と名乗った。苗字があることからして平民ではないの

だろう。その割には家（なのか部屋なのか）は狭いし、他に人が住んでいる気配はない。

直隆も名乗った。

初音は目を丸くして、「なに、あんたミドルネームがあるの？」といった。

みどるねーむとはなんだ、意味が分らない。

「あんたがこの時代の人間じゃないことは分かった。で？どこから来たの？」

「近江の国、小谷じゃ。時は永禄十三年」

「永禄？知らない、今は平成だし」

直隆こそ知らない。うーん、と腕を組んで目の前の女は胡坐をかいた。筒状の寝間着がめくれ上がって膝上まで露出する。

なんと破廉恥な。思わず怒鳴ろうかとしたものの、そこまで親切にしてやる義理はない、と考え直し開けた口を閉じた。

調べた方が早いや、と呟いて初音は枕横にあった小さな四角い物を取った。パッチン、と音がしてそれはさらに長くなる。

一瞬、飛び道具かと直隆は構えたが、どうやら違うようだ。せわしなく親指を動かしていた初音の目が見開く。

「永禄って戦国時代…？」

なんだ、それは？

「織田信長とか武田信玄とかが、うようよしていた所から来たの…？」

直隆は驚愕した。血が逆流したような衝撃だった。

「なぜ織田の名前を知っている！？」

再び直隆は混乱してしまった。後に初音に「あんときの直隆のパニツク状態、ケータイで録画しとけば良かった」と笑われたほど、取り乱した。

一方が取り乱すと、一方は冷静になるのかもしれない。そして、こういう異常事態は女の方が受け入れやすいのかもしれない。

「あのね、松本四朗直隆さん」

巖かに初音が口を開いた。

「あんた、遙か昔の時代から、現代にやってきちゃったみたい」
それもミニマムな体になって。

異文化交流

妙に静かだった。

壁の一面、うらうらとした日が布の隙間から射しており、鳥の鳴き声が遠く聞こえる。

外の様子を伺いたくて、直隆は台から降りた。蒲団の上を滑るように下る（この奇妙な台は炬燵というものだと後に知った）。

遙か上の天井からかかっている布をめくると、珍妙とっていいほどの景色が見えた。

大きな箱がたくさん並んでいる。その間に申し訳程度に木々がちょこちょこと立っていた。

屋根瓦でも薫ぶきでもない、本当にただの箱だった。巨大なものあれば、小さなものもある。奇抜な色もあれば、くすんだ灰色もあった。

手を伸ばそうとすると、透明の壁に阻まれた。叩くとドン、と音がする。

すぐ真下に見えるのは、道なのだろうか。しかし黒い何かに覆われていて、真中に白い点線が行儀よく並んでいる。

サアアと音がして、赤い箱が道を滑って行った。

猪まで箱か。

この国の住人はよほど箱が好きだと見える。

室内も箱だらけだ。

箆笥らしきものの上にある薄っぺらい箱。その横にある銀色の箱。

奥の廊下（と呼ぶにはあまりにも短い）の途中にある大きな白い箱。

直隆はため息をついた。

混乱が収まってしまえば、やってきたのは焦燥だった。

自分はこんなところでこんなことをしている場合ではない。

織田家と朝倉家の板挟みになってい^{あるじ}る主のそばを離れて、なぜこん

なところで途方にくれなければならないのか。

小谷の城はどうなっているのだろうか。長政さまは。再び透明な壁を叩いた。

それは、ただドン、と籠ったような音を鳴らすだけだ。

絶対に帰ってやる。苛立ちにも近い感情で直隆は壁を叩き続ける。どうやってここに来たのかさえも分からない、館に帰る途中に真っ白な光に包まれた。

どうしたら元の時代に帰れるか、その術も分からない。

だが、木村初音という女がこの世界との唯一の繋がりだった。

あの小生意気で無礼で破廉恥な女。

再び台の上によじ登った直隆は、ふと長方形の箱に気が付いた。色とりどりの丸が並んでいる箱だった。

「暇ならテレビでも見ときな。電源ここ」

初音がそう言って指差した緑色の丸を押してみる。

ヴン、と音がして、箏笥の上の箱が明るくなった。

「曲者にごさる〜」「出会え〜出会え〜」

「あつー!!」

直隆の世界がその中に入った。同じ髪型をして同じ服装をして、しかも直隆よりも小さな男たちが、こちらを見向きもせず騒いでいる。若干小奇麗に見えるのは気のせいだろう。

「その者！　これ、ここじゃー!!」

大声で叫んでみても、手を振ってみても、同輩は直隆に気が付かない。

どうやら城内で騒ぎがあったようだ。

そうだ、あの中に入れば元いた世界に帰ることができる！

湧き上がる歓喜を抑えつけて、直隆は箏笥に登りはじめた。取っ手

に足と手をかけ何度か落ちそうになりながらも、息も絶え絶えに頂上に着いた。

彼らは畳の上で、剣を交え戦闘中だった。こんなに近くにいるのに、直隆なぞ眼中にない。

がむしゃらな曲が流れるこれは、お神楽なのか。祭囃子なのだろうか。

「ぐわっ！」

男の一人が切られた。

「助太刀いたす！」

腰の剣を抜き構えた瞬間、彼らは消え

「は~~~~い、テレフォンショッピングのお時間です！」

代りにどん、と中年女の顔が前面に押し出された。

「うわ!!」

思わず後ずさった直隆に構わず、丸い顔の女はいかに蒲団が軽くて温かいか、ぺらぺらと紹介しだす。一方的に、うっとおしいほどの熱意と共に。

小袖ではなく、どちらかといえば、初音が来ていたものと同じ着物を着ていた。

「布団などどうでもいい、さきほどの男らを出せ！」

きれいに無視された。中年女はそれがいかにお得かをくどいほど念を押して、直隆に向かって丁寧な礼をした。

つられて礼をする。

今度は女が消えて、頭の悪そうな娘が奇抜な衣装をまとい、身体をぐねぐねと動かし踊っている。

「わしは松本四朗直隆と申すが……」

恐る恐る名乗っても娘は答えない。嘲るように笑っただけだ。

無礼にもほどがある。こやつらは。

目の前にいるのに、誰一人直隆を眼中にもかけない。

一方的に内輪で騒いでいるだけだ。騒々しい祭囃子は拍子を変えずと鳴り続けている。

手を伸ばしてみても、例の透明の壁に阻まれる。

頭にきて切りつけると、箱の中はプツ、と音を立てて暗闇になった。

わしをないがしろにするからじゃ。

鼻を鳴らして刃を収めた。

帰宅途中。

地下鉄の電車の中は、すし詰めとまではいかないものの、そこそこに混んでいる。

真っ黒の外を眺めながら、初音はある懸念に取りつかれていた。あのチビ侍が世を夢んで切腹していたらどうしよう。

あり得る。大いにあり得る。

お侍さんとは訳の分からん美意識を持つ人たちじゃなかったのか。

冗談じゃない、死体を処理するのは自分なのだ。ゴキブリ以上に嫌だ。

それとも、もしゴキブリに食べられていたら……。ひいー！！

電車の中で真っ青になったり、ムンクになったりしている初音を、くたびれたサラリーマンのおっさんが興味深そうに眺めていた。

心配は杞憂だった。それよりも。

「ぎゃああああ！ あたしのブラビ。がああああ！！」

昨年の夏、ボーナスはたいて買った液晶テレビにぎっくりと傷がいつている（ご丁寧に十文字）。

「あまりにも無礼なので切ってやった」

「無礼なのはお前じゃああ！ 返せ、ブラビ。を返せ！！ 返せ戻せ産めえええ！！」

炬燵の上で得意げに顎を上げる直隆を引っ掴み、暴れるキングコングさながら前後左右に振り回す初音。

「何をする、不届き者が！ 目が、目が回る！！」

「このまま空に放り投げてやろうか！？ 遠いお空へ飛んで行け！！」

遠いお空ではなくベッドの蒲団に叩きつけられた直隆は、すぐさま体勢を立て直し、剣を抜いて睨みつけてきた。

「お？ やろうつての？ このチビが」

足下の蒲団を引っ掴んで勢いよくめくると、チビは悲鳴をあげて転がった。

「ご主人さまに逆らうんじゃねーよ」

「お主^{めし}などが主人であるものか！ わしの主^{あるじ}は浅井長政さま唯一人ぞ」

浅井長政。

聞いたことがある。

確か、織田信長の妹、お市が嫁いだ先だ。その三人娘の一人、茶々は豊臣秀吉の側室になって、徳川家康に滅ばされた。

「取りあえず、ゆっくり話を聞くからさ。ちよつと待って」

言いながらコートを脱ぎ、制服の白ブラウスのボタンをはずす。帰ってからすぐに家着に着替えるのが初音の習慣だった。

「な……な……なにをしておるんじゃ、お前は!!」

「え？ 着替え」

「男の前で女が堂々と着替えるな！ この恥知らずが！」

身長20cmのチビが一丁前に男というか。真つ赤な顔してギャンギャンわめいている直隆がおかしくて、つい笑ってしまう。

「見るのが嫌なら、あっち向いてなよ」

挑発するようにブラも外す。大きくはないが小さくもない、年の割にはまだハリもある自慢の胸だ。

直隆は目をそらさない。魂を抜かれたように呆け、じっと初音を凝視している。

初音も直隆から目をそらさなかった。濃厚な時間が止まったように、時計の針の音だけが流れる。

沈黙を破ったのは初音だった。

「さぶう」

鳥肌の立った腕をさすって、くたびれたタンクトップを被り、パーカーを羽織る。

「着るなら脱ぐな！ 脱ぐなら着るな!!」

「どないやねん」

思わず関西弁で突っ込みながら、夕食とビールを用意した。

「さ、聞こうか」

浅井長政の一臣である松本直隆は、城から帰る途中に白い光に包まれ、気が付いたらここにいたという。

タイムトラベルの概念が、よく分らない。

ドラえも。や映画じゃあるまいし、「じゃあ未来に行こう!」「過去に行こう!」とお気軽に行ける訳がない。

だから帰り方を教えると言われても、何とも答えられない。

「お主はわしを遠い過去からきたというたな。ではここは未来の日

本であるというか」

「うん。あんたがいた時代から500年後ぐらいの東京」

「とうきょう？」

ああ、そうか。戦国時代には東京なんて、まだない。

「えーと、江戸……？」

「なんとも辺鄙な土地に住んでおるのう」

初音はため息をついた。

自分の常識と直隆の常識が摺り合わない。時代が違いすぎるのだ。

これは、あれだ。一種の異文化交流だ。

一々を最初から説明してやるのは面倒なことこの上なかったが、それでも初音は辛抱強く教えてやった。

浅井長政の行く末に関しては、黙っていた。どこまで話していいものか分からなかった。

日本の歴史にさほど詳しくない初音も有名だからこそ知っている。

直隆の主は織田信長を裏切り、戦いに敗れ、自害した。

浅井家は滅亡する。その家臣たちはどうなったのだろうか。

「帰り方は分からないけど」

脳味噌を絞るように考えていた初音が口を開いた。

「調べてみれば、何か分かるかも」

「調べる？ 乱破はらでも使うのか？」

「ラッパ？ ラッパなんて吹いたら近所迷惑じゃない」

噛み合わない会話は、壁にぶつかったり、目まぐるしく回転したり
の挙句、一つの結論にたどり着いた。

「直隆がいつ死んだと分かればいいんじゃないだろうか」

「不吉なことを大真面目で言うな」

「例えば、どこかの戦で死んだとか、畳の上で大往生とか、側室の上で腹上死とか」

「なんなのだ、最後のは！」

「とにかく、現代じゃなくて、その時代で死んだ、という事実があれば、間違いなくあんたは帰ったことになるんだからさ」

「あんた呼ばわりするな、そして呼び捨てにするな！ この名を呼んでいいものは、長政さまと父上だけじゃ！」

「ただご主人大好きっ子なんだよ。」

「じゃ、チビ」

「……」

「そーら、チビ、おいでー。ビールをあげよう、飲めるかな？」

「いつか殺す。絶対、殺してやるからな！」

「あたしを殺したら、チビはどうやって生きてゆくのかな。そのちっちゃい体で」

「うッ……」

まあ、飲め。と初音は湯呑にビールを注いでやる。

「適当に作ったものだけど食べな。チビ、今日一日何も食べてないでしょう」

コタツの上に置いていった菓子パンは手つかずのまままで放置されている。

不貞腐れたように箸（割り箸を切って作ってやった）を動かし、鮭をほおぼっている直隆を鑑賞しながらビールを一口。

顔のつくりは端正と言っている。ミニチュアな着物も脇のちょこんと差している刀も、上等であることが分かる。

きつといい所のおぼっちゃんなんだろう。調べ物は案外簡単にいくかもしれない。

明日は休みだし、図書館にでも行ってみようか。

気持ちよく酔いが回ってきた。カバンに直隆を入れて、そうだ、チビ専用の食器も買おう。ドールハウス用ならば丁度いいに違いない。リカちゃん用は可愛すぎるかな。ああ、愛しのブラビ。も修理

に出さなくちゃ…。

眠気がやってきてもそもそとコタツに潜り込む。

お風呂は明日でいいや。

とにかく疲れた。

遠くで誰かが呼ぶ声がしたが、初音は構うことなく眠りに落ちて行った。

街に出よう

翌日。

初音は直隆の声に叩き起こされて、目を覚ました。

「日はとうに登っておるぞ、はよ起きんか、このうつけ者！」

「まだ九時じゃんよー……、あと五分」

休みの日ぐらいゆっくり寝させてくれ。

蒲団に潜り込むと、直隆は怒っているのだろう、蒲団をバシバシ叩いてくる。

無視して再びまどろみの中に落ちようとした時、太もも辺りに妙な感覚がした。

埒が明かないとみた直隆が潜り込んだきたのだ。

「きやああ！ なにすんのよ、スケベ！」

さすがに飛び起きて、布団をはぐと、足の間から直隆がコロリと転がった。

「ちよつとー！」

真っ赤な顔して足掻いているチビを引っ掴むと、直隆もこれまた赤い顔をしている。

「寝ている女の股ぐらに顔突っ込むなんていい度胸じゃないの。ああん？」

「もっ……元はといえばお主が悪い！ いつまでもたっても起きんものだから……！」

「だからって蒲団に潜り込むか、普通。変態、ドスケベ、好色男子！」

「なんだとう、言わせておけば！ この恥知らず、性悪、無礼者！ 繰り出される、The 怒鳴り合い。十分後、二人は怒鳴りつかれてぐったりしていた。

「と……取りあえず、朝ごはんにしよう」

「そうじゃな……」

ご飯に味噌汁というシンプルな朝飯を用意している間も、直隆は炬燵の上でふんぞり返って待っているだけだ。

あー。本当に昔の人って亭主関白よねー。

「白米なぞ贅沢な物食うておるな」

「白米じゃなかったら何食べていたの？」

「麦飯じゃ」

「へえー。健康に良さそう」

どうもかみ合わない話を続けながら、直隆にヒアリングをしてみると以下の事が分かった。

父は浅井家の家老であること（おぼっちゃなかよ）。

年は21歳であること（年下かよ）。

妻がいたこと（ブルータス、お前もか！）

そして、織田信長を憎んでいること。

同盟を結ぶにあたって、浅井家は恩のある越前の朝倉家には手を出すなと条件を出した。

が、信長はあっさりと約束を反故した。

城内は朝倉家に味方するか、織田家に味方するかで意見は真っ二つに分かれているという。

「いかに織田の勢力が甚大であろうと、わしはあの男が許せん」

よっぽど嫌いなのだろっ、直隆は米粒を飛ばしながら激高した。

「義を通すに意もなにもあるべきか。強き敵ならなお良し、その為ならばこの命、喜んで差しだそう」

「チビはそれでもいいかもしれないけどさ」

「チビ言っな」

「それで、あんたの大事な浅井家がなくなってしまったらどうするの」

そうなることを、初音は知っている。

むっ、と直隆が黙る。

「お主も遠藤殿と同じことを言うのだな」

そう言っただけで初音を見た。

直隆にとって、ここは未来だ。自分の生きた時代を知れば、そして元に時代に帰れたならば歴史を変えることができる。

だが、そうなればこの時代も変化する可能性がある。

「それは卑怯だろう」

きつぱりと直隆は言い切った。

「わしは卑怯者になどなりたくない」

だから、頼む。

「どんな死に方をしたかなど、わしに知らせるな。帰れるか、否かを教えてくれればいい」

「分かった」

頷いた初音の好奇心は、違う所へと向かった。

「で、奥さん、どんな人？」

目を見開いた直隆の顔が赤く染まる。

なぜかその仕草に（自分が聞いたくせに）、初音はむっとした。

「名を、お雪といった。大人しい、無口な女だった…」

言葉を交わしたのはたった一回、子を生んだ時だった。

——雪は幸せに存じます。

そう言つて、はにかむ様な笑顔を残し、数日後に夢くなった。続いて生まれた子も。

「あ……」

初音は何と言つていいか分からない。

「その……ご愁傷さまでした」

「身体の弱い女子おなこであつたからの」

好きだつたんだろうな、その人のこと。

思いつつも、内心、ほっとしている自分に、今度はむっとした。

初めて外に出た直隆は、カバンの中はご不満だつたらしい。

あまりにもギャンギャン吠えるものだから、仕方なしに胸ポケットに入れた。

これじゃあまるで、あたしが頭痛い馬鹿みたいじゃない。

侍のフィギュアを胸に刺しているなんて。

だが、現代人は他人に対して無関心だということがよく分かった。誰も彼もが気付かない。

そして直隆も初音の言いつけをよく守って大人しくしていた。

「お休みの日に出かけるなんて、久しぶりだなー……」

仕事で精魂疲れ果ててしまう初音は、休日は家に引きこもっている。ぼーっとしている内に一日はあっという間に終わってしまうのだ。初冬のよく晴れた空は、青く遠くどこまでも続いている。

ここは、何なのだ。

初音のコートの胸ポケットから顔を出して、直隆はただただ戸惑っていた。

合戦でもあるのではないかというほどの人々が無表情で歩いている。溢れるほどの色と騒音に、直隆は目眩を起こしそうになった。外にいるのに空気が悪い。吐き気を催しそうだ。

だが、その中で初音も動じることもなく、風景の一つになっている。ということは、これがこの世界の日常なのだろう。

田園がない、そこかしこにそびえ立つ珍妙な建物、狭い空、僅かな緑。

この国は、五百年の内にどれだけ変貌したのだろうか。

「大丈夫」

直隆の動揺を察したかのように、初音が小声で囁いた。

「あたしがいるから、大丈夫」

根拠のないその言葉は、だがしかし直隆を安堵させた。自分の存在を知ってくれている人がいること。ただ一人の味方がいること。安堵は好意に転換……しなかった。

「これがいいかなー」

見た事もない色とりどりの商品が並んでいる（おもちゃ売り場と言っ
うらしい。目的使用不可解な物ばかりだ）一角で、初音が手に取っ

たのはドぎつい色の衣服だった。

「女子の顔おなこが描いてあるが、それは誰のものだ」

「勿論、チビのものに決まっているでしょう」

「わしにそんな着物を着せるつもりなのか！」

「しーっ。大人しくしてなさいって」

「却下だ、却下。お主、もしやわしで遊ぶつもりではあるまいな」

初音は無言でそれを棚に戻した。凶星だったらしい。

この女……！

怒りに直隆の顔が赤くなる。

「あ、ほら、お家も売っているよ。どう？」

「いらぬ。桃色御殿なぞ誰が住むか」

「ちえっ」

結局、直隆が選んだのは質素な白い食器だった。透明の箱の中にウサギやらがそれを持って飾られていたが、あれは一体何だったのだろう。

チビ専用食器はシル。ニア・ファミリーシリーズに決定した。

さて、次はネットカフェに行かなければ。初音のパソコンは数か月前にぶっ壊れて修理にも出していない。

個室に入って、直隆をモニター横に出す。

「疲れた？」

「わしを見くびるな。疲れてなどおらん」

「そういいつつも、多少ぐったりして見える。」

「ま、ここなら誰もこないし、しばらくゆっくりしてな」

「そっぴいっつも、適当にキーワードを打ち込んで行った。」

「文字が横に書かれておるのか」

直隆も興味深そうに覗きこむ。が、しばらくすると、モニターの光にやられたのだろう。静かに座りこみ、キーボードを叩く初音の指を眺めるようになった。

その様子に少しだけ微笑んだ初音だったが、数十分後には険しい顔に変わっていた。

簡単に見つけられるとタカを括っていた直隆の消息がどこにもないのだ。

浅井長政やその家臣たちはすぐに見つけられたというのに。
スクロールしていた初音の手が止まった。

画面に映し出されたのは、小谷城跡。石垣が崩れたその城跡は、ほとんど山と同化しており一種の物悲しさを感じさせた。

遠い昔、ここには確かにお城があつて、人が住んでいたんだ。
そして直隆もここにいたんだ。

不思議を通り越して、なんだか奇妙な感覚だった。

「どうした？」

「あ、いや、なんでもない」

慌てて画面を消す。

知らない方がいい。知つてしまえば、絶対にショックを受ける。
ふいに涙が出そうになった。痛みにも似たこの感情を初音は何と言
うのか分からずに、ただ黙ってパソコン画面を睨みつけていた。

「ごめんねー、結局わからなくて……」

冬の夕暮れは早い。初音は駅から家までの道すがら、直隆に謝った。

「でも、もう少し調べてみるから」

「許さん」

胸ポケットで直隆が不満そうに鼻を鳴らす。

「どうしても許してほしくば、びーるを差し出せ」

ああ、気に入ったのね。

「ビールで済むんだったら、安いものです」

クスクス笑って、ふと自分の影が長く伸びている事に気が付いた。

「直隆。ちよつと丘の上の公園に寄って帰ろうか」

夕暮れ時に

夕暮れ時にふと思い出す。

ぶらりと城下の外れを歩いているときだった。

一人の小坊主が数人の男たちに、蹴られ殴られの暴行を受けていた。

「何をしておる、止めぬか」

「あつ。これはお侍さま」

聞けば地蔵に備えてあつた饅頭を盗み食いたらしい。

「寺の小坊主ともあろうものが」

「とんだ不届き者だ」

再び蹴られているまだ幼い坊主は、身を縮めて必死になって堪えている。

「それくらいで良いだろう。もう勘弁してやれ」

男たちが去った後、小坊主を助け起こした。

汚れている顔を拭いてやり、もうするのではないぞ、と頭をなでると、ペコリと頭を下げてびっこを引きながら歩いて行った。

浦島太郎みたいだね、と初音が笑った。

竜宮城には行けなかったみたいだけど。

全くだ、と直隆も笑った。

鯛や平目の舞い踊る御殿ではなく、こんな珍妙な世界へと来てしまった。

茜色に染まる天空は、あの頃と変わらない。

直隆のいた500年前と同じように、鳥が鳴いてねぐらへと帰ってゆく。

降り積もる記憶は、思い出となって蓄積されてゆくのだろうか。

丘の上の長いす、こーしーを飲みながら初音と並んで箱の町を見ているこの今も、いつか懐かしい思い出と変わるのだろうか。

夕暮れ時にふと思い出す。

初音は走っていた。背中のレストランがガチャガチャなる音がやけに耳に着いた。

足がもつれてすつ転ぶと、近所の悪戯小僧たちが追いついてはやし立てた。

「やーいやーい転んでやんの」

周囲を囲まれてはやしたてる男子たちが怖くて、転んだまま初音は泣き出した。

声はますます大きくなる。

「姉ちゃんをいじめるなっ!」

弟の怒鳴り声がして顔をあげると、小さな背中が見えた。

手を広げて自分をかばっている。その細い足が震えているのは、やはり弟も怖いのだろう。

「なんだよ、チビのくせに」

「生意気だぞ」

それでも興が冷めたのか、男子たちは口々に文句を言いながら去って行った。

「姉ちゃん、もう泣くなよ」

弟に手をひかれながら家へ帰る途中も、初音はグズグズと泣いたままだった。

「またいじめられたら、ぼくが守ってあげるからさ」

「うん……」

「姉ちゃんは本当に泣き虫なんだから」

お主にそんな頃があったのか、と直隆が笑った。
遅しく育ったな。

本当に、と初音も笑った。

今度、実家に帰ったらお礼参りでもしてやろうかな。

あの時の空の色もこんなに赤い色だった。

少し悲しくなるような、切なくなるようなとてもきれいな茜色。

遠い記憶は日常の隙間にころりと転がっている。

ひんやりした風を受けながら、缶コーヒー（直隆の分は今日買ったばかりのコップに入れてやった。お気に召したらしい）を飲みながら、小さな侍と並んで街を見下ろしているこの時間も、その内遠い記憶の仲間入りをするのだろうか。

「さて」

初音は立ち上がって、直隆を手のひらに乗せる。

「帰ろうか」

あたしたちのお家へ。

女の価値観

戦国の世は漢かんの時代だった。

武力によつて名を後世に残す事を最大の誇りとし、無意味な死を唾棄した。

敵といえども強き者には素直に賛じ、臆病者には愚弄をもつて迎えた。

弱きものは滅す。弱肉強食。力ある者だけが生き残る、そんな時代だった。

そして直隆も、戦乱に生きていた男だった。

だから、彼は今ある状況に我慢がならない。

女に飼われている、この境遇。

初音は朝、起きると大抵不機嫌である。

奇妙な柄の寝台から身を起こし、寝間着を脱いで全裸になる（正確には全裸ではない。ぱんつと呼ばれる憎いあんちくしょうをはいている）。

室内に干してある洗濯物から胸当てとタンクトップを着ると、そのまま洗面所へ向かい、しばらく水音が聞こえる。

台所（かまどがないのがないのが不思議だ）で何かを飲むと、コタツに入つて化粧を始める。

初音の手が動くに従つて、みるみるうちに異なる顔が出来上がってくる。

肩まである長い髪を後ろに束ねた瞬間が、ここだけの話、直隆はほんの少し気に入っていた。

顔つきが変わるのである。まるで何かに戦いを挑むような、静かな顔。

白いシャツを着、黒いスカートを履き、腕時計をつけ、コートを羽織ると、初音はそこで初めて直隆を見る。

「行つてきます」

一言だけ言つて、出て行つてしまふ。

だいたい。

寝たふりをしながら、こつそり初音を觀察していた直隆は起き上がった。これから長い時間、この空間に閉じ込められなければならない。

だいたい、女というべきものは、もっと慎ましやかなものだ。

がさつ（大口をあけて笑う）、無遠慮（直隆の着物を無理やり脱がせようとした）、破廉恥（毎度、ためらいもなく素っ裸になる）である女は、事あるごとに直隆を愚弄し、からかい、いじめた。

あり得ない待遇だ。

こんな体でなければ、直隆は堪忍袋の緒が切れて手を上げていたかもしれない。

先日の、初めて外の世界を見た衝撃は、未だに胸の内にくすぶっている。

初音と同じ大きさの人間たちが、無数にいた。

今まで——初音しか知らなかった直隆は、無意識に初音を異邦人だと思っていた。自分が正常なのだと。全てが大きな空間にいながらとんでもない、異邦人なのは自分の方だったのだ。

愕然と同時に、とてつもない恐怖を覚えた。

敵に向かう時とは異なる、宥めることのできない恐怖だった。未知であることが、こんなに恐ろしいとは。

だから丘の上の公園で、馬鹿女にちょっとだけ親しい感情を抱いたのはあれだ。

夕日がやけに赤かったから、郷愁に誘われただけだ。

満員電車で身を縮めながら、初音はぼんやりと外を見ている。
直隆はプライドの高いチビだった。

初音をメイドとしか見ていないらしい。

まあ、あの時代の女は男に対して従順なのだろう。
でもあたしは現代の女だ。

初音は小さなため息をつく。

だけど男というものは結局、従順な女を好む。

素直で可愛くて、健気な女。

今まで付き合ってきた彼氏たちの最後の言葉はいつも同じだった。

「可愛くないんだよ。お前は」

初音はもう一度ため息をつく。

女としての価値って何だろう。

車内に首を巡らすと、女性誌の吊革広告が揺れていた。

最強モテ服、愛されフワゆるパーマ、超ラブリーなネイル！
可愛くなくちゃ生きている意味がない！

飛び込んできた文字に、初音は目を反らす。

林田 健二

「じゃあ企画書、ここを直しておいてね。明日の朝、またチエックするから。お疲れ」

テキパキと指示を出すと、初音はさつさとタイムカードを押して、ちゃっちゃと帰ってしまった。

「最近、店長は彼氏でも出来たのかな」

「そうですねえ」

はやしだけんじ

林田健二の横で美園明美が間延びした声を出した。

早番だろうが、遅番だろうが、結局開店から閉店まで残っていることの多い初音は近頃、時間通りに帰宅する。それも猛ダッシュで。

「猫でも飼い始めたんじゃないですかねえ」

「ああ、成程……」

あっさり納得した健二を、ちらりと明美が見上げた。

健二はリスペクトする人物の一人に初音を上げている。

本社と現場の板挟みの中、崖っぷちで必死に立ち続けているその姿は尊敬に値したし、初音の言った一言に感銘を受けたこともある。

「あのね、林田君」

現状の不条理をなじった時だ。同意されると思っていた。

「会社は会社なりの道理があつて、世界はそれで動いている。あたしたちが貰うお給料はその我慢代金も含まれているの」

まるで自分に言い聞かせているようだった。

「楽な仕事なんてないんだから」

「店長ってかつこいいいな」

「ですよね」

健二の横で明美が甘えた声を出した。今年四月に入ってきた新入社員は感嘆するように続ける。

「あたしもあんな風になりたいな」

若い彼女でさえそう思うのだ。健二はちょっと誇らしげな気持ちになった。

「ちよつと三番^{トイレ}。帰ってきたら企画書見なおすから」
ついでに喫煙タイムも含まれていることを明美も知っている。

「はあい、早く帰ってきてくださいね」

新妻が出勤する夫を見送るような風情で、可愛い笑顔でヒラヒラと手を振った。

喫煙所は閑散としていて、男が一人、静かに煙草を吸っていた。

「あ、マネージャー。お疲れ様です」

「よお」

健二が声をかけると、柏木^{かしわぎ}は唇の端を持ち上げるようにして笑った。美術部のマネージャーである彼は四十前半で渋みのある男前で、新人女子からおばちゃん連中にまで壮絶な人気がある。

どちらにせよ、停留所（定年間近のおっさんどもの在留場所）ポジション同様の美術部マネに昇格した男は、企画と改新を繰り返し前年比250パーセントの数字を叩きだしたやり手である。

健二らが属する会社もその恩恵を受け、三年前にこの有名老舗百貨店に売り場をオープンすることとなった。

新人店長の初音を気にかけていたのか、オープン当初、柏木はよく売り場に顔を出した。

まだ社会人になりたてだった健二は、マネージャーと店長が仲良く話している姿を見て、早く自分もあの中に加わりたいと切望したものである。

その雰囲気は、ただのマネージャーと店長の間に流れるようなものではないことも気が付いていた。今では全く感じられない密な雰囲気。

「お疲れ。どうだ、調子は」

「何とかボウズ《売上ゼロ》はまぬがれました」

「厳しいよなあ、どこも」

柏木の横に座り、煙草に火をつける。

「お宅の店長、元気？」

「最近、ペットを飼い始めたみたいです」

「へえ、ペットねえ」

男なんじゃないのか、と言外に含めたような言い方に、健二は若干ムツとする。

「女なんて、結局は一緒さ」

空気が伝わったのだろうか、柏木はクツクツとおかしそうに笑い、煙草を灰皿に押し付けた。じゅ、と煙がよがる。

「あんまり、幻想を持たない方がいいぞ。あいつらは夢と打算で生きている」

「じゃあ、なんで柏木さんは結婚したんですか」

その左薬指に光る指輪を見て、健二が聞いた。皮肉のつもりだった。

「決まっているだろう。処世術さ」

大人の男というものは。

手を上げて喫煙所の扉の向こうに去ってゆく柏木の広い背中を見ながら、健二は思った。

大人の男というものは、何かを失って、何かを誤魔化しながら生きているものかもしれない。

酒盛りの夜

林田健二曰く「かつこいい」、柏木マネ曰く「夢と打算で生きているうちの一人」であるところの木村初音は、静かに酔っ払っていた。そして絡んでいた。小さな侍に。

「若ければいいってもんじゃないでしょう。なんで男っていつもいつも若い女に鼻の下を伸ばすのよ、その前に自分の腹を引っ込めてみなさいよ」

「わしはそんな事、一言もいっておらんし、わしの腹はへこんでいるわ」

初音の向かい、コタツの上にちよこなんと座っている直隆も静かに応ずる。二人はなぜか正座で、室内の温度は暖房をつけているにも拘らず多分氷点下、この冬一番といわれた屋外よりも冷え切っていた。

最初は仲良く飲んでいたのだ。日本酒を買ってきたよ、ほら直隆の時代のお酒だよ、おお、気が利くではないか、どれまずは一献……、うむ、うまい！ 本当だ、これおいしいゝわいわいきゃつきゃつ。しかし、ほんわかほのぼのムードは直隆の一言で一気に消散してしまった。

「以外に年増」

27歳の妙齡女子にとってその言葉は非常に痛い。ましてや目前にいるのは会社の上司でも無神経な後輩たちでもない、つまりは取り繕うことも見栄を張る気もおこらないチビ侍だ。

初音は思う存分、不機嫌を晒し、対する直隆もやや困惑しつつもいや間違ったことは言っていないと開き直り、空気は絶対温度まで一気に下降していった。

「あんたになにが分かるってのよ。分かったふりして何でも偉そうに言わないでよね」

支離滅裂。ほとんど言いがかり。

「おぬしを心配してだな」

「そんなものはいらない」

いつそ痛々しいほどの目で、初音は直隆をにらんだ。

「心配も同情もいらない」

その顔はまるで泣くまいと必死に堪える子供だ、と直隆は思う。悲しみのような、愛おしさのような小さな何かの隅に芽生えた。しんと静けさだけが通り過ぎてゆく。どれほどの時が経っただろう。

「ねえ」

ふつと目を緩ませて、初音が打って変わった声を出した。

「その着物、着たきり雀じゃない。服をつくってあげる」

「服？」

突飛な展開に驚く直隆をよそに、初音は今度はご機嫌で鼻歌を歌いながら

「あれはどこいったかな」

こちらに尻を向けて、四つん這いになって何かを漁っている。その悩殺ショット、プライスレス。

さすがに直隆の顔と、もう一部の箇所血の気が集中した。

「あつたー！」

そんな直隆お構いなしに、初音は目的のものを見つけたらしい、無邪気な歓声を上げる。

「ほーらかわいいでしょー？」

べらんとみせられたものは、理解しがたい模様をした布きれだった。

「ピンクの花柄だよ」

意味不明の歌を歌いながら、長方形に切り、真中に穴をあけた。

「さ、脱げ」

「は！？」

「脱げていつてんの」

問答無用、初音は恐るべき速さで直隆を引っつかむと、楽しそうに

それはもう楽しそうに脱がしにかかった。

「こら、やめんか、この恥知らずが……！」

暴れようとしても酒が回って思うように動かない。まるで猫の弄られる鼠のごとし。

「ほらっ！ 完成……！」

裸に布切れを頭から被せられ、紐もどきで腰をくくられた直隆はコタツの上にちよんと置かれた。

「ちよんまげ原始人@現代……！」

そのまま初音はゲラゲラゲラと腹を抱えて笑い転げた。

こ……この女……！！

心の隅に芽生えた何か。悩殺ショットに煽られた欲情。そんなものは遠くにさよならだ。

「そこに直れ！ 手打ちにしてやる……！」

「やる気！？ 受けて立つ……ぶわはははは、やっぱり似合いすぎる……！」

「こんなわしに誰がした……！」

午前零時に繰り広げられたドタバタ劇は隣人及び階下住人による「うるせえ！」ノックにて強制終了となり、結局はなにもかもがうやむやになったまま宴会の続行と相成った。

ちなみに二人仲良く壮絶な二日酔いを迎えたことでなぜか絆は深まり、前日の出来事（「年増」発言、ちよんまげ原始人）はお互いに水に流すことにしたらしい。

京都へGO！

「あのさ」

社員食堂で向かい合ってB定食のオムライスを食べている林田に、思い切って初音は聞いてみた。

「周りに戦国時代に詳しい人っていない？」

「はい？」

「いや、いい。ごめん。忘れて」

「直隆がいつ死んだと分かれば、過去に帰ったことになる」という推定の元、調べてみると約束したものの、調査は完全に行き詰っている。

パソコンで調べてみても名前は見当たらないし、図書館で該当しそうな本を漁ってみても、思わしい物は出てこなかった。

チビ生活に慣れたらしい直隆は、余裕が出たからかしきりにその事を持ち出すようになった。

戦国の人間の寿命は、信長の敦盛に謡われているように「人間五十年」。昔は、戦以外にも病気や災害で人があっけなく死ぬ確率が非常に高く、死は今よりもとても身近にあった。

だからこそ侍と呼ばれる人々は、武勲を立てて誇り高く鮮明に己の存在を知らしめたかった。

直隆も例外ではなく、自分の痕が歴史の中に皆無であることに、痛く傷ついている。

「やはりわしは、このトンチキな世界で死にゆく運命なのであろうか……」

トンチキ言っな、結構満喫していたくせに。

初音は内心むかついたが、黙っていた。

一種のホームシツクなのだと思う。それでも何の役にも立てないことにとでも申し訳なかった。

「小谷の山から眺める鳩にの海は」

ぼんやりと窓を見ながら、直隆は言った。

「晴れた日は遠くまで輝いてそれは美しかった」

クリーム色のカーテンの先に、自分の生まれ育った国の光景が広がっているのだろう。

「お館さまは言われた。この風景こそが我が真髄であると。わしはまだ元服前の子供であつたが、それでも痛いほどその気持ちが理解できた」

「お館さまの初陣は野良田の戦いで十五の頃じゃ。倍以上の敵を相手にそれは見事な戦いぶりだったと兄上と遠藤さまから繰り返し聞いた」

壊れた蛇口のように、後から後からむかしの話が零れ落ちてゆく。

帰りたい。帰りたい。帰りたい。

ここは自分の住む世界ではない。

「もう少しだけ待って」

突き放すことなんてできない。直隆の居場所は石垣が崩れた、山と同化しているような城跡の残る現代ではなくて、きちんと整備されている頃の遠い昔なんだ。

「ね、お願い。必ず何とか探し出すから」

確信はないのに、そう言うしか初音はできなかった。

よほど必死な顔をしていたんだろうか、顔を上げて直隆は少しだけ笑った。

「すまぬな」

プライドの高い直隆が謝ったことに初音は仰天したが、つとめて顔には出さなかった。

「いますよ」

林田の声に、現実に戻った。食堂のざわめきと共に。

「兄が京都の大学で院生やってまして。侍かなんかの研究をしているんです」

きれいにからになった皿を前に、林田はハンカチで口を拭いた。

「店長、歴女なんですか？」

「そうだ、京都に行こう」

「は？」

「お願い、林田君」

がつしと手を握られて、林田は目をむいた。周りにいる人々も驚いた。

「お兄さんに会わせて。連絡先も教えて。無礼なこととは分かっているけど、この通り」

手を握られたまま、深々と頭を下げる初音に、林田はうるたえるばかりだ。

「けっして迷惑はかけないから。お願いします」

「お願いされました」

顔を上げると、ぐつと手を握り返された。

「ぼくが責任もって、兄を会わせます。理由は聞きません。任せてください」

「ありがとう。恩に着る」

なぜか男同士の熱い友情がごとく見つめ合う二人に、周りの人々はどよめき、訳の分からないまま拍手を送った。

遠くでケータイが鳴っている。

はまじつたつし

林田博はうめきながらベッドから手を伸ばし、それをつかんだ瞬間、下に転げ落ちた。

床に散らばっている大量のレポート用紙を下敷きにしながら、構わずケータイを開く。

「……なんや」

「兄さん、まだ寝ていたんだ」

愛しの馬鹿弟の冷徹な声がする。

「今日、店長に会う約束だったんだろう。待ち合わせは一時だろう。もう十二時じゃないか」

ああ。面倒くせえ。二時間しか寝ていない、朦朧とした頭でぼんやり思う。

なんで俺が弟の勤め先の店長に会わなきゃいけないんだ。

「だってダルいねんもん……」

「今更文句は言わない。じゃないと、あれ。家賃滞納で僕が代わりに払ったこと、母さんにばらすよ」

「なんでそんな子にそだってしまったかねえ、お前は。昔はもっと素直で……」

可愛い馬鹿だったのに。

いいから、さつさと支度をしてくれ。相変わらずの冷たい声で言うと、弟は電話を切ってしまった。

ああ、本当に面倒くさい。

博はのそのそと起きると、身支度を整えた。といつても着替えただけである。

木村初音という女を、よくは知らない。第一、なんでわざわざ会わなければいけないのかも分からない。

今、流行の歴女という奴だろうか。

「歴史がブームになることは、別にええと思うねんけど」

それでわずわらされるのは、まっぴらごめんだった。

ま、梅木よりはマシかな。恐るべき伝説を持った後輩の顔を思い浮かべる。

ある時、合コンの人数集めに駆り出された席のこと。

内、一人の女子が、なんたらかたらかたという戦国武将をモデルにしたゲームにはまっているとキラキラした笑顔で言った。むっつり黙

つて聞いていた梅木は、ある一言で突然キレた。

「あつはははは」

大声で笑った次の瞬間、卓ごとひっくり返した。

「戦・国・武将が四文字熟語ごときの必殺技放つかああああ！ 聖

。土聖矢ちやうねんぞ！」

お懐かしい！

と思わず声を上げた男どもはともかく、料理、ドリンクはグシャグシャになるわ、その小娘は泣き出すわ、女子たちは小娘かばってブーイングだわ、店員は駆け付けるわの大わらわになったそうなの。

きつと木村初音も同類に違いない。

いささかげんなりしながらドアを開けると、冬にしては暖かい風が吹いた。

ああ、そろそろ春だねえ。

愛車にまたがると、ペダルを蹴るように漕ぎ出す。もうすぐこの御影通りの木々も薄紅色のトンネルとなることだろう。

その数時間前。

初音は新幹線に揺られていた。

「悪い人じゃないんですけど、子供なんです。八年も留年した揚句に未だ大学にいる人だし」

林田は兄をそう評した。

「気を悪くしたらすみません。先に謝っておきます」

初音はゆっくりり首を振った。

自分のわがままで、相手に時間を割いてもらうのだ。

直隆はべったりと窓にへばりついている。その後ろ姿を見て、初音は笑いそうになった。

子供のようになつて無邪気な仕草だからではない。ずっと着ていた着物が

擦れはじめたため（原始人ではない服を）作ってやった。ちょんまげ頭にフリルが似合うじゃないか。

「飛んでいるようじゃ」

あつという間に流れてゆく景色を見て、感嘆するように直隆がいう。「実際は走っているけどね」

カーテンで隠しているため、他の人からは直隆は見えない。見えたとしても、酔狂な格好をさせられた人形としか思わないに違いない。お願い事を聞いてもらえるといいんだけど。

初音は頬について、飽きずに外を見ている直隆を見やった。

待ち合わせ場所である三条土下座前ベタすぎのに立っているその女を見て、博は後悔した。

顔くらい洗ってくればよかった。

27と言っていたから年は同じなのだろう。それでも博の頭の中では、なんとなくチャラチャラした小娘だと思っていた。

違った。

御所に向かって土下座をする高山彦九郎像の下、背筋を伸ばしケータイもいじつてもいない初音は、周りから浮いて見えた。

意志の強そうな顔をしている。美人だが、どこか柔らかさに欠けた感じだった。

「こんにちは、林田博さんですか」

近づいて行った博に、にっこりと笑いかけるその笑顔も。

「すみません。おそなりまして」

ぺこりと頭を下げると、初音は深々と頭を下げた。

「申しわけありません、お忙しい所をお呼び立てしてしまいまして。ご迷惑とは重々承知しておりますが…あの、これつまらないものですが」

「待った、待った」

菓子折りを押し付けられ、慌てて博は両手を振る。堅苦しいのは嫌なのだ。

「面倒な挨拶はいいですから。何か飲みに行きましょう」
こつち、と三条大橋の方を指差した。

鴨川沿いのカフェで、二人は向かい合って腰を下ろした。

「おれに話とは」

断ってから煙草に火をつける。

「侍の研究をしていると伺いました」

「…まあ、そうですね」

「単刀直入にお聞きます。戦国時代の北近江、浅井長政の家臣の一人に松本四朗直隆という人物がいたことはご存じですか」

煙を吐いた後、博はまじまじと初音を見やった。不躰なほどに。

「知らんな」

「…そうですね」

残念そうに息を吐いて、初音はちらりとカバンを見た。

「侍といっても、戦国時代だけに生きとったわけやないんですよ。

平安時代、江戸時代や明治初期にもおった。概要はかなり変わりますけど。そしておれが研究しとるのは」

灰皿に煙草を押しつける。

「『菊と刀』で知ってます？」

「はい」

初音は頷いた。

「世界で最初の日本文化論ですよ？」

「正確にはアメリカ人類学史上最初の、やけど」

第二次大戦にあたってアメリカは敵である日本の研究を人類学者であるルース・ベネディクトに依頼した。彼女は日本を訪れたことは無かったが、文献と日本移民の交流を通じてその書籍を出版する。

簡単に言ってしまうと、日本文化を文化類型論の視点から恥の文化

ととらえ、日本人の恩や義理・人情の問題、恥の意識など分析したものだ。

林田博が着目したのは、その文化を育て花開いた後期の侍たちの痛烈な美意識であって、戦国時代にはあまり関心がなかった。

「だから、悪いけど松本四朗直隆なんて田舎侍は知らん」

「侮辱するな、このげ……うげっ！」

初音のカバンから上がった小さな怒鳴り声は、初音の一撃で止まった。

「……なんですか？今の」

「メールの着信音です、お気になさらず」

ほほ、とわざとらしく笑った初音は、今度は真剣な顔で博を見つめた。

「わたしだけでは、どうも調べられないんです。知り合いの方に詳しい方とかいらつしやいませんか」

「何を知りたいんです」

この女はなんでこんなに必死なんだ。

博は思わず後ずさりしながら聞いた。

「だいたい、なんでそんな名も知らない武將を調べようとする。その為になんか東京から京都まで来たりする。好奇心にもほどがあるだろう。」

「全てを」

「訳が分らん」

ほとんど叫びそうになりながら、博は言った。

「自分、なんか隠しているやろ。全部言えや、そんなら協力したる」

「分かりました」

初音の目が据わっている。

「林田さんは、口は堅いですか」

「えっ……？ まあ、堅い方ですが」

「二人きりになれる所はありますか？」

「はいっ？」

「色々、言い訳を考えましたが、隠し事はせず、一切をお見せします。ですから他に人がいない所へ連れて行ってください」

瞬時に博の頭は回転した。

ここから近いラブホは木屋町の……。違う違う！NOそっち方面！
「ほな」

落ち着かせるため、煙草に火をつける。

「ちよつと遠いけど、家に来ますか」

レポート用紙と煙草が山盛りの灰皿が置いてある、散らかった自室で、博は信じられないものを見た。

「木村さん、これは……」

「松本四朗直隆さんです」

ちよこんと台の上に置かれた、ちよんまげ姿の……。

「なんでメイド服着てんの……？」

「仕様です」

フリルのメイド服を着用した侍だった。

当人無自覚

メイドふく
冥土服！？

冥土服といったか、この男は。

「死装束をわしに着せたのか！」

怒りのまま怒鳴っても、初音と林田博（おおよそ貧弱な男だった。収まりの悪そうなもさもさ頭に、目が異様にでかい）は二人でこそそと話しているだけだ。

「ちゃんまげに冥土服も似合いますなあ」

「出来心なんですけど、気に入ってますの」

「どこで買ったんですか？」

「夜なべで作りました」

「わしの話を聞け！」

二人は同時に直隆を見ると、につこりと不気味な顔で笑う。

「ええもん着せてもるとるなあ。その服はな、この時代の戦闘服やで。それも超一級の」

「そうそう。このあたしがチビの為を思ってたんだから。感謝しなさい」

「そう……なのか？」

その割には股のあたりがスウスウするが。
にしても、この部屋は汚すぎる。

初音の部屋も大概散らかっているが（「女の部屋は宇宙なの」と意味不明な言い訳をされた）、それ以上にひどい。

この台の隅にある縮れた毛は、どうみても毛髪ではなさそうだ。貧弱男はいそいそしながら、初音の家にあるような白い箱（かなり小さかったが）を開けた。

「すみません、ビールしかないけど飲みます？」
びーる！

直隆の好物だった。

「もらおう。えびすであれば申し分ないが、はっばうしゅでもよいぞ」

「……木村さん、あなた、どういう教育されてるんです？」
呆れたような博の声に、初音は顔を染めた。

「すみません、給料日に奮発したら、味、しめちゃったみたいで」

小人さながらの人間、しかも戦国時代からタイムスリップ。あまりにインパクトありすぎて、博の脳みそはつるりとその事実を飲み込んだ。多分、ちょんまげにメイド服という奇想天外な格好が全てを納得させたのかもしれない。

梅木が知ったら、諸手を上げて喜びそうだな。

同じ研究室に所属する後輩が狂喜乱舞する姿が目に見え。

それでなくともどこぞに売れば、高い値がつくだろう。

だが初音はきっぱりと言い切った。

「この子はあたしの家に来たんです。だからあたしのもんです」

四本目の発泡酒のブルドックを開けながら、ろれつの怪しい舌で。

「けど、おれが引き取った方が、はよわかるかも知れんじやないですか」

「嫌」

「嫌て……。お前はどうかねんな」

「お主についておっても確信は無い」

お猪口のビールを飲みきった直隆は、それをずいと初音に押しやった。阿吽あうんの呼吸で、初音がお代わりをついでやる。

「で、おれにお前のことを調べるといふんかい。都合良すぎるやろ」

「あたしはね、林田さん」

とろんとした目が色つばいな。襲ったら強姦になるんだろうか。ちらりとわいた思いを慌てて散らす。

「直隆が悲しい目に会ったのが嫌なんです。自分の預かり知らない所で、色んな変な人にいじくり回されて、もてあそばれて、見世物にされて、プライドを散々傷つけてしまうような思いをさせたくない

んです。それにあたしの唯一の……」

一気にまくしたて、そのまま横にぶつ倒れた。

「うわあっ！ ええっ！ ちょっとっ！？」

「寝ているだけだ」

仰天する博に、直隆が冷静な声を出した。

「五本飲むと、ひっくり返って寝入ってしまう。で、次の日「やだー！ どうしよう、また化粧したまま寝ちゃったー！」と大騒ぎする女だ」

「あ……。さいですか」

初音は幸せそうな顔をして、クウクウと寝息を立てている。

この部屋に女がいるなんて何年ぶりのことだろうか。

数えようとして、止めた。虚しいだけだ、と博は苦笑する。

「おれも暇じゃないんやけどな……」

論文の提出日は迫っている。本当はのんびりビールなぞ飲んでいる場合じゃないのに。

「無理を申しとおることは重々承知しておる」

「それが人にものを頼む態度かいな」

それでも、頼られるのは嬉しいことだった。

酒というものは、心を吐露するには打ってつけのものであるらしい。博は自分でも気付かないまま、直隆に今における違和感について切々と語っている。

物心ついたときから、博は勉強一色の日々だった。それが当たり前だと思っていたし、自分のやるべきことだと考えていた。同い年の友達は全てライバルで、外に出て遊んだ記憶もあまりない。

成長してゆく過程で、ほのかな恋心を抱いた相手たちには、好意をよせられることは無かったし、逆に気持ち悪がられた。ちっぽけなプライドを守る為にも、勉強しかなかったのだ。

ところが、京都の国立大に受かって入学してから、世界は一転した。灰色の日常から、バラ色の楽園へと。

親は狂喜乱舞し、息子を褒め称えた。

大学名を出せば、女の子たちは尊敬のまなざしで博を見た。

軟派なテニスサークルに入り、友人もできて、彼女もできた。

まさしく大学デビューだった。

夜の木屋町、新歓コンパ、徹夜の麻雀、青空の下のテニス、明け方まで飲んだ合コン、くだらない馬鹿話、居酒屋のアルバイト、初めてのセックス。

めくるめく日々はキラキラと輝き、あつという間に過ぎ去っていった。

周りのみんなは、社会という荒波へと飛びたっていったが、博は留年することを選んだ。

楽園を出たくは無かったのだ。

最初の違和感は、五年間付き合っていた彼女と別れたことだった。

先に社会人となった一つ下のその子は、仕事が大変でしんどい、とよく愚痴をこぼした。

「大丈夫。なんとかなるて」

だけでも、彼女が求めていたのは、そんな軽い励ましではなかった。結局、真摯に叱ってくれた同じ会社の先輩と恋に落ち、二股されたあげく振られてしまった。

新しい恋人はすぐにできた。が、同じことが三度起こった。

「イライラすんねん」

つきあった当初の憧れるような眼は、明らかに冷めきった軽蔑の色があった。

「なんで卒業して就職せえへんの。ずっと大学におるの。普通のことやろ。博みてるとイライラする」

ああ、そうか。

初めてそこで分かった。

彼女たちは、博自身を見ていたわけではない。名門大学卒の男が欲

しかつたのだ。大手に就職して、高い給料を持って帰る夫が。その証拠に、三人とも「結婚」をよく口に出した。愛情の証だと思っていたのに。

親だつてそうだ。

自慢できる息子が欲しかつた。うちの子は京大にいつておりますの。その自慢の息子は今だに親の脛をかじっている。母親は嘆き、弟を引き合いに出す。

「健二はちゃんと仕事をしているうちゅうのに、あんたはいつまでもフラフラフラフラと……」

かつての友人たちは社会の前線に出て、バリバリと働いている。結婚している奴もいれば、子供ができた奴もいる。

一般的な人生のレールを素直に歩き、一般的な幸せを満喫しているのだ。

「うちの課つて人使い粗すぎやわ」

「通勤に二時間もかかつとんねん。片道やぞ」

彼らの愚痴は、とても楽しそうに自慢げに聞こえた。

そして博の生活を羨ましがり、昔の大学生活を懐かしがる。

おれは、今、ここで何をやっているんだろう。

人の役に立つことのない研究、かつての樂園にしがみついているだけの日々、足がすくんで進むことのできない未来。

「なあ、お前は……。なんや寝とるんかい」

直隆は空き缶に寄りかかつて、俯いている。

辺りはすっかり暗くなつて、時計の針は六時を指していた。

博は電気をつけると新しいビールを取りに、台所へと向かう。

夢を見た。

初音は横向きになつて寝ている。

後ろにはなぜか等身大になった直隆が座っていた。
じっと自分を見ている。

初音は動けない。

と、直隆の手があがって、初音の肩にそっと触れた。ゆっくりと下がってゆく。

肩、脇、腰。

うずきが身体の芯を支配し始めた。声が漏れそうになる。

お願い。お願い、そのまま――……。

「だあっ！！」

がばりと起き上がると、呼吸が荒かった。

窓からは柔らかい日差しが差し込んでいて、呑気な小鳥の鳴き声がある。

直隆はチビのままで、胡坐をかいてじろりと初音を睨みつけ、博はちゃっかりベッドで寝ている。

「えっ……」

なに、今の夢。初音の顔がみるみる内に赤く染まっていた。

お願い、そのまま……。

そのまま、なにをしてほしかったんだ、あたしは！

欲求不満か！？ 欲求不満だ、ええ、悪うござんしたね、かれこれ三年もやっていない。

だけど、なんで相手が直隆なんだー！ー！！（だーだーだー……
↑エコー）

パニックのあまり、拳動不審な行動（部屋の中を行ったり来たり）をしていた初音だが、取りあえず片付けようと、散乱しているビー

ル缶を手近のビニール袋にいれ始めた。
直隆に声をかける勇気がない。夢のせいで顔を見ることも出来ない。
本人は、ただ初音を睨みつけているだけである。

「いーですよ。置いてください」

音に反応して博がのっそりと起きた。

「あっ！すみません、起しちゃった……」

「や、どうせ起きなあかん時間なんで」

今日は大学に行かなければならない。

「あの、じゃあ申しわけないですけどお暇しますね」

一通り部屋の中を掃除した初音は、深々と頭を下げた。

「お邪魔しました。本当にごめんなさい。酔っ払ったあげく、寝て
しまつて……。ご迷惑おかけしました」

「いえいえ」

つられて博も頭を下げる。

「さ、帰るよ」

直隆は不貞腐れたように、無言で初音のカバンに潜り込んだ。

「こら、チビ。ちゃんとお礼を言いな」

「あの、木村さん」

玄関先で靴を履いている初音が顔を上げた。

「あの件ですが、お受けします。ただ、時間がかかることは……」

「本当ですか？」

ぱつと明るくなった顔に、博はちよつと戸惑った。

罪悪感がチクチクする。

昨夜、酔いに任せて、寝ている初音に手を出そうとしたのだ。

肩から脇へ、腰へとゆっくり這って行った手は、ひやりとした冷気
を感じて止まった。

振り向くと寝ているはずの直隆が、剣を構えて博を睨みつけている。
腰を落とし、今にも飛びかからんばかりの体勢で。

ちょんまげにメイド服の滑稽さすら吹き飛ぶような威圧感だった。

「なんや。ナイト気取りか」

冷静な声を出したはずが、上ずった。

「内藤などではない。わしの名は松本じゃ」

「据え膳食わぬは武士の恥ってゆうやろ。それにそんな体で何がで
きんねん」

「その女に手を出すな」

ぴたりと視線を博に合わせたまま、身長20cmの男は低い声で言
った。

「こんな体でも、お主の首をかつ切ることができる」

やってみろや、とは言えなかった。すざましい殺意に気おされて。

「あ……アホらし」

捨て台詞のような一言を残して、博はベッドに潜り込んだのだった。

何度も礼を言いながら、初音が帰った後、博は玄関でガリガリと頭
を掻いた。

「あいつら」

——直隆が悲しい目に会うのは嫌なんです。

——その女に手を出すな。

「惚れあつとるんちゃうか」

本人たちは気が付かないまま。

声は茶色のドアに跳ね返って消えた。

京都巡りする体力もなく、初音はまっすぐ京都駅へと向かった。

直隆は一言も話さない。初音も夢のことがあってもどうも気まずい。
無言のまま帰宅し、カバンから飛び出た直隆はやっと口を開いた。

「ここに座れ」

「えー？」

初音はとにかくシャワーを浴びて、ゆっくり寝たい。

「いいから座れ」

なんなの、もう。文句を言いながらも、コタツの前に正座した初音に、直隆は説教を開始した。

女が一人身で男の家に行くとは何事か。しかも酒を飲み、拳句の果てに爆睡する。無防備もいい所ではないか、もっと女の憤みをわきまえよ。云々《うんぬん》。

「そうは言っけれどさあ……。人目にあんたを見せるわけにはいかないし、ビール飲みたいって言ったのはチビだし、そりゃ飲みすぎて寝ちゃったのはあたしが悪いけど……」

「チビ言っな。わしが止めなんたら、お主はあの男に手箆めにされていたのだぞ」

「手箆め？」

身を乗り出した初音に驚いたように、直隆が身を引いた。

「良かったー。あたし、まだ女の魅力あるんだー……」

「馬鹿！問題はそうではなくて……！」

この女の思考回路が知りたい。青白吐息でそう思った。

博という男を、直隆は快く思っていない。彼の語った心情は、ちゃんちゃら甘いものだった。

直隆が生きていた時代の男たちは、守るべきものがあつた。それが主であれ、家であれ、己の美意識であれ。女はもつと壮絶だ。意志など関係なく利権により嫁がされる。

ここは違う。人生に置いて膨大な選択肢がある。初音はその選択に責任を持っているように見えるが、あの男はただ逃げているだけではないか。何にかは分らないが。

しかも自分の目の前で、初音の体に触った。目的は明らかだった。それ以上、手が進んだら本気で殺す気だったのだ。

「じゃあ、チビが守ってくれたんだねー」

「ち……違う、わしは……うぐッ」

掴まれて、そのまま初音の胸の谷間に埋もれた直隆は悲鳴を上げた。

「ありがとう。お礼にセーラー服を作っ^てあげる」

「せーらーふくなるものも戦闘服なのだろうか。
息も出来ず、遠ざかる意識の中で、ふと思う。
そしてまた、股がスウスウするものなのだろうか。」

林田と美園

「店長って男運なさそうですね」

休憩時、山中屋社員食堂にて。初音の京都土産の「おたべ」をつつきながら、しみじみと美園明美が言った。

「そうかな」

京都まで初音が兄に会いに行った理由を、健二は知らない。兄の博に電話して聞いてみると「うん、まあ、そのごによごによ」と訳の分からない言語を發した。

あの役立たずめ。

それでも、「ありがとう、林田君。おかげで何とかなりそう」と感謝の顔で言われると、あんな兄でも紹介してよかったと心から思う。「そうですよ。仕事ができる女はたいがい、ダメ男に引つかかるもんなんですから」

「それはもしかして昨日の人のことを話しているの？」

「いらつしゃいませ」

その客が入ってきたとき、林田健二は検品作業をしていた。ふらりと店内に入ってくるのではなく、足は迷いもなくこちらに向かってきた、購入意識は強い。売り場を見ると、美園明美は違う客にセカンドアプローチのタイミングを計っている最中で動けない。行かないや、と思ったときに初音がストックから出てきた。一瞬で売り場の空気を読んだらしい。

「お伺いいたしますので、どうぞご覧くださいね」

親しみ以外の何者でもない完璧な笑顔。三十手前くらいのその男は、

何を勘違いしたのか顔を少し赤くした。

「お祝いか何かでお探してしょうか」

初音はするりとセカンドアプローチに入る。

「実は友人の新築祝いを探しに来たんですけど、なにがいい分からなくて」

「まあ、そうなんですか！ おめでとうございます。人気があるのは、こちらですね」

――さすが店長。

入荷した絵たちをチェックしながら、健二は耳をそばだてながら苦笑した。初音が見せている絵画は五万円ほど、新築祝いとしてはかなり値が張るほうだ。きつと客を見栄張りタイプと診断したのだろう。よしよし、確定だな。このままいけば本日の予算は達成だ。

しかし、だんだんと客の反応が鈍くなってきた。生返事しか返ってこない。

不審に思ってそちらを伺ったとき、客が声を上げた。

「やっぱり、初音ちゃんだ。おれだよおれおれ、覚えていない？」

おれおれ詐欺かあんた誰！？ かなた 彼方から健二は突っ込んだ（心の中で）。多分、美園明美も。

「どちらさまですか？」

当の初音は覚えていなかったらしい。首をかしげて、男を見上げた。

「ほら、H町の近所に住んでいた森田譲司だって。びっくりしたな、こんなところで会うなんて。元気だった？」

「ああ！」

そこでやっと思い出したようだ。そして戸惑っているようでもある。森田譲司は周りにかまうことなく初音を（売り場のと真ん中で）飲み誘い、なおかつ携帯番号まで渡していた。

「電話してくれ。待っているから」

ラッピングされた五万円の絵を下げて、森田が売り場を去った後、林田は初音に聞いた。

「お知り合いだったんですか」

「うん、幼馴染って言うのかな」

「仲良かったんですね」

「そうね、お礼参りしたいくらいに」

ふふつと笑って、初音はストックに入ってしまった。

「お礼参りというのは」

空になった菓子箱を脇によけて、美園明美は化粧直しを始めた。食堂の真ん中で、男を目の前にして、恥ずかしいともなんとも思わないところが、現代っ子だなと健二は思う。

「あれですかね。なんか仕返しをしたいんですかね。それとも願い事がかなったからお礼を言いたいのかどちらかですよ」

まあ、どっちでもいいけど、あの男は嫌いだ、と美園明美は眉をひそめた。

「ずいぶんと嫌っているね、悪そうな人じゃなかったけど」

「まず第一に、靴が汚かったです。どんなにスーツがかっこよくと、靴まで神経使っていない男はダメです。第二に、相手方の職場で遠慮なさすぎ。周りに気を配れないのがバレバレです。第三、自分のこと覚えているのが当然っつー神経が信じられない！ 第四、なにが電話してくれ、まっているから、だ！ キザ男！！」

「君はあれか、店長のお母さんか」

呆れたように、実際呆れ果てて、健二は目の前の後輩を見やる。

「あたしはただ、店長に幸せになってもらいたいです」

美園はカチャカチャとメイク道具を終いながら、再びしみじみと言った。

「すごく強そうに見える人に限って、すごく弱かったりするじゃないですか。しかも店長って絶対に弱み見せないタイプでしょう？ つかバキつと折れちゃいそう」

「どうかな」

健二は日本橋店に配属されてから、初音の背中を見続けていた。そ

んなに脆い人だとは思わない。

「あの時もなーにも無かったような顔していたしな」

柏木マネとのいざこざも、すべて後から知った。たくさんの尾ひれをつけた噂で。

初音自身は何も言わなかったし、健二も聞かなかった。

学校の仲良しグループとは違うのだ、あれやこれやを聞きたてて何になるというのだろう。

「そろそろ時間だ」

休憩終了、五分前。椅子をたって売り場へ戻る。

隣的美園明美から、化粧品独特の甘ったるい匂いがした。

——電話してくれ、待っているから。

そういつて渡された紙切れを、初音は駅のホームでぼんやりと見ている。

森田譲司。小さいころ、しょっちゅういじめられた。怖くて怖くて、学校へ行きたくないとしたをこねたこともある。

だいたい、譲司たちが狙ってくるのは下校時間で、いつも初音は必死に逃げた。

彼は覚えているんだろうか、あたしを追いかけて髪をぐしゃぐしゃにしたり、スカートをめくったりしたことを。

彼は知っているんだろうか、それがどれだけ恐ろしかったことを。

そこまで考えて、初音はふと気がついた。譲司は暴力を振るったことは無かった。

たまに調子に乗った子分が初音を殴ったり叩いたりすると、えらく怒った……ような気がする。

まあ、いいや。

かばってくれた弟もついでに思い出しながら、初音は紙切れを切り

裂いた。

譲司に電話する気はまったく無い。昔のことを恨み辛み言うことも、彼が今何の仕事をしているかなども興味が無い。どうでもいい。

白い紙の破片が、はらはらと無機質なゴミ箱へと消えていくのを見届けて、初音はきびすを返した。

駅を出て、ヒールを鳴らしながら、自宅への道をたどる。

カツカツカツと小気味よいこの音が、初音は好きだった。

大人であることを認識させてくれる。

家では直隆が待っている。

そう思うと自然に笑みがこぼれる。

誰かが家で自分を待っていてくれること。

「いつてきます」「ただいま」といえること。

それは初音にとって安らぎだ。

直隆は彼氏ではない。友人でもない。夫でもなければ兄でも弟でもない。

それでも初音の中では特別な存在になってしまった。

今、直隆を初音の元から取り上げようとする輩がいれば、自分は全力で抵抗するだろう。

例えば本人の為だとしても。

林田兄に言った言葉は嘘偽りではない。

「あたしの唯一の」

癒しなんです。直隆がいなくなったら心のバランスが崩れてしまうんです。

いつかは元の時代に戻ってしまうかもしれない。

ずっと一緒にいることはできないかもしれない。

だから、せめてそれまで二人でいさせてください。神さま。

テレビっ子

「ただいま」

帰宅した初音に向けられた言葉は、「おかえり」ではなく、三つ指でもなく

「腹がへったぞ、飯はまだか」
だった。

先程の切なさはどこへやら、げんなりしながら靴を脱ぐ。

このクソ侍。メイド服着ているんだから「お帰りなさいませ、ご主人様」くらい言え。

むかつ腹がこみ上げる。

修理から戻ってきたブ。ビアと直隆は現在蜜月状態で、お気に入りのお天気キャスターまでいるらしい。

男のテレビ好きは時代を超えて共通するものなのか。

まあ、ともかく、初音が着替えて夕御飯の支度をしている間も、二人でそれを食べている間も、直隆は賑やかな画面から眼を離さない。話しかけても生返事。

「あ」

ブチンと音がした。初音がリモコンで消したのだ。

「何をする、見ておったのに」

「ご飯食べながらテレビ見ない。お行儀が悪いよ」

そうなのか、と直隆は素直に初音に向き直った。変なところは聞き分けいいんだから、と初音は笑いをかみ殺す。

「珍妙な国じゃな」

昨日の残りの筑前煮をつつきながら直隆は言った。

「なにが？」

「他人が結婚したの別れたの、なぜ一々（いちいち）騒ぎ立てるんじゃ。どうでもいい人間の私生活を、これまたどうでもいい人間が

したり顔で評する。もつと論ずることもあろうに」

「それが仕事の人もいるから」

「それだけではない。わしはお主とてれびしか知らんが、やはりこ
こは変じゃ。筋が通っておらん上に、頂点に立つべき人間が不甲斐
なさすぎる。我が変わって治めてやろうという気概のある者もあら
ぬ。好き放題に言つて、見て見ぬふりをしている」

「……」

「世界はもつと単純であるべきじゃ。強いものが勝つ。弱きものは
滅びる。それでよいではないか」

「色々複雑なんだよ」

「初音はここが好きか？」

「えっ!？」

驚いて初音は直隆を見た。名前を呼ばれたのは初めてだ。

「す……好きも何もここしか知らないし」

「ならばわしと来い」

「はっ!？」

「小谷は良い所じゃ。きつとお主も気に入る」

うんうん、と思うだすように遠くを見る直隆にどう返していいか分
からず、初音はフリーズしていたが、慌ててご飯をかき込み、むせ
た。

「何をしておるんじゃ、顔が赤いぞ」

「う、うるさいッ!」

直隆がここにきてから一カ月が過ぎた。

淡々と日常が過ぎる通過で、お互いのリズムのようなものが生まれ
てくる。

初音が仕事でいない時、大抵テレビを見て過ごす。

情報を映像で流すものだと言われた。この時代は本当に便利な物で溢れ返っている。

直隆の時代にテレビがあれば、戦はもっとやりやすいものになったかもしれない。

「では、本日は信長の動向に迫ってみましょう。現場中継の山田さん」

「はい、山田です。今、私は尾張の清州城前に来ています」
とか何とか。

初音が帰ってくると、一緒に夕餉を食べ、風呂に入る。

二人で入ることを直隆は断固拒否した。

一度、無理やり着物を脱がされ、禪まで取られ、まじまじと観察されたことがある。

「すごい。いつちよ前に付いているんだー…」

「見るな、この破廉恥女!!」

だから、初音が風呂から上がった後、洗面器に湯を張ってもらい、それに浸かる。

上げれば新しい禪をしめて（さらしを適当な大きさに切ったもの）、寝間着（ぱじゃまというものを初音が作った）を着て、蒲団（これも作ってもらった）に入る。

直隆の生活区域は全てコタツの台の上にある。

なので、朝、初音が化粧をする時は、寝ているふりをしてその様子をうかがっていることが多い。

髪を括った後の勇ましく変貌する女の顔を見るたびに、直隆は内心、ふふふと笑ってしまう。

なぜかは分らない。同志に似たような、誇らしげな気分になってしまうのだ。

ある晩。

夕餉の後に電話がかかってきた。

「あ…お母さん」

初音にも母がいるのか、まあ、いるだろう。まさか川から流れてきた訳でもあるまいし、と直隆はテレビを見ているふりをして耳をそばだてている。

自分の母を、産みの母を直隆は知らない。

父がどこぞで手をつけた女だと聞いた。正室に当たる女は愛情を注いではくれたが、それでも幼心に違和感があつた。恵まれているのだ、不服などではない、と何度も自分に言い聞かせて直隆は成長した。

「うん…元気。うん、うん…」

初音もそうなのだろうか。こちらに向けた背が妙に頼りなく見える。

「そんなことを言っても…大丈夫だから。あたしは大丈夫」
威勢の全くない声。

「だから、それは仕事だから…。お母さんの言っていることも分かるけど…」

心細そうな、ほんの少しの苛立ちが混じつたような。

「あはは、それ、男の人に言うセリフだよ」

笑いすらも乾いている。

「…だから！働いた分お給料をくれるし、そういう仕事を選んだのはあたしだから…！何も知らないのに勝手に決めつけるのはやめ…ごめん、泣かないで、ね？お母さん」

垣間見えた顔は心底困つたようだった。

「うん、遅いからもう切るね。体につけて…。おやすみ」

切った後のため息をひとつ。

「…そんなに頑張つて、仕事があなたに何をしてくれるの、だってさ」

直隆は言葉が見つからない。

「親の泣いて卑怯だよ。ものすごい罪悪感が湧いちゃう」
「……」

「お風呂入ってくる」

「う、うむ」

テレビから場違いなほど明るい笑い声が聞こえた。

夜。

ふと押し殺した嗚咽が聞こえた。

ベッドの初音を見やると、すっぽり蒲団をかぶって丸くなっている。きっと泣いているのだろう。

声をかけようとして、やめた。

直隆に泣いていることを気付かれないに違いない。

あの女はそういう女だ、脆い部分を決して人に見せない。

弱さも甘さも、全てさらけ出してくればいいのに。

嗚咽はその内、寝息に変わった。

直隆は蒲団を抜け出して、初音の元に向かう。

ゆっくり掛け布団をひっぱると、涙にぬれた女の顔が現れた。幼子のように片手を軽く握って口元に当てている。

「子供のようにじゃの。泣きながら寝入るなぞ」

膝について、その涙を拭ってやった。

それから、自分より数倍大きな手をポンポンポン、と叩いた。まるで子供をあやすように、ゆっくりと優しく。

人生 色々

昨日の電話は重かった。

初音は朝の満員電車の中で、大きなため息をついた。隣のOLらしき女がちらりとこちらを見る。

——お向かいのアキちゃんにまた赤ちゃんができたんですって。

そう、という間もなく、母は言葉をついだ。

——あなた、もう帰ってらっしゃいな。体壊したらどうするの。いつも電話してもいないじゃない、そんなにがんばるお仕事なの？ お母さんはもつと女の幸せというものを初音にも知ってもらいたいのよ。

精一杯の反論は涙で封じ込められた。

母が若かった頃とは時代が違う、それにもつと過酷な状況で働いている人だっている。それでも母は頑なに自分の価値観しか信じない分かってくれ、とは言わない。でももう少し、信頼してくれてもいいじゃないか。

受話器の向こうから聞こえる嗚咽は、初音を詰る^な。

悪意ではなく、純粹に心配されている事が辛かった。

あたしは親不孝者なのかなあ。

上を見上げると吊皮の向こうに結婚情報雑誌の広告があった。真っ白いウエディングドレスを着た花嫁が、一ミクロンの不幸もない華やかな顔で笑っている。

あー畜生、目に眩しいぜ。

ぼんやりとしながら、ふと森田譲二を思い出した。もしあの人と結婚して故郷に帰ったら母は嬉しさのあまりトチ狂うかもしれない。久しぶりに会って電話番号渡されただけに、初音の頭はすでに結婚までぶっ飛んだ。

もったいない、あのメモ捨てるんじゃないかった。

再び溜息をついて、いや、あれで良かったんだと思いなおす。
溺れている時に藁に縋ると、ロクなことにならない。

あの頃。初めて背負った店の責任に、初音は押しつぶされそうになった。同時に不況の嵐が襲い、精神的にも参っていた。売り上げは取れない、本社は伸びない数字を叩く。

悔しい事も、悲しい事も、まるで終わることのないループを回っているようなやりきれなさ。

だから、手を差し伸べてくれた柏木に縋った。多分、柏木でなくても良かったのだ。藁であれば、誰でも。

結果的にさらに苦しむ事になるとは露知らず、誰も幸福にはならなかったのに。

もう二度とごめんだ。

三度目の溜息をついたとき、隣のOLも同時に息を吐いた。

知らぬふりをしながら、この人も色々あるんだろうなとちらりと思っただ。

電車は走る。それぞれの人生を抱えた、たくさんの人を乗せて。

さて、その頃の直隆である。

激しく動揺しながら、相棒のブラビ。を見ていた。両手を顔に当てて、指の隙間から。

「けいこさん、もう君を離したりしないよ」

「しんいちさん！」

画面の中の男女が口を吸いあっているのである。

「ひ……ひ……卑猥な……！」

両手を顔に当てたまま、直隆は叫んだ（でも見ている）。

「なんじゃ、うぬらは！　そういう淫らなことを公共の電波でやっ

ていいと思っておるのか、年端も行かぬ子供が見たらどつする、乳
繰り合うならばよそでせい！！　だいたい、こんな朝っぱらから！
！！」

男と女は聞く耳持たない（当たり前だ）。

その内、画面はゆつくりと右へ流れ、二人は消えた。

「ふう、やれやれ」

額の汗を拭って、直隆は一息をつく。初音と暮らす日常に置いて、
お互いの常識が大きく異なるのはもう慣れたが、それでも驚くこと
が度々ある。テレビで公然と口吸いをするならば、初音が直隆の前
であっけらかんと裸になったり、嫌がる直隆の着物を無理やりはい
で一物をまじまじと見られる出来事も納得できる気がした。

「なにそれ、あたしが変態みたいじゃないの」

帰ってきた初音は、直隆の話を聞いて不満そうに鼻を鳴らした。

「それにキス一つで大騒ぎするなんて」

「きす？　海の魚と関係があるのか」

空になったおちよこを差しだすと、初音がお代わりをついでくれた。

「ああ、そっか。チビの時代にはキスとかないんだ。あのね、好き
だよ、愛しているよってという愛情表現」

「表現……」

現在、一般化している「キス」は、明治に入ってきたものでいわゆ
る外来物である。が、直隆の知っている「口吸い」は性行為の一種
だった。だから激しく動揺したのである。

「あははは」

初音は声を上げて笑った。

「そりゃびつくりしたでしょう」

「うむ」

正直に直隆は頷いた。初音はまだクスクス笑っている。目の下がほ
んのり桜色に染まっていた。十分酒がまわっている証拠だ。

「ね、キスしようか」

直隆は眉を顰めて初音を見上げた。目の前の女は、今までに見た事ないほど妖艶な顔をして、唇に手を当てている。

「御免こうむる」

「どうして？ 唇だけじゃないよ、他の所も舐めてあげる」

刺激的な言葉に直隆の心臓がドクンと跳ねた。だが努めて静かな声を出した。

「いらぬ。女の施しなぞ」

「あ、そう。じゃあ、お風呂入ってくる」

あっさりと初音は諦めると、さっさとバスタオルを引っ掛けて風呂場に消えた。

「あ……」

コタツの上にポツンと取り残された直隆は、しばらくしてまた初音にからかわれたことに気が付いた。

あの女……！

この夜、直隆が真剣に初音復讐計画を立てた事は想像にしがたくない。

深夜の衝撃

それから約一週間が過ぎた。

着せていたのがメイド服だとばれて、怒り暴れた直隆に初音が逆切れし、そのちょんまげを短く現代風に切ってしまったとか。

「ハゲの部分がぼうぼうで前からウザいと思ってたの！」

酔っ払った勢いで二人一緒に仲良くベッドに寝たのはいいが、初音無意識のエルボーが直隆にクリティカルヒットし、勢いで床にたたきつけられた（べしっ！）とか。

まあ、色々あったが基本的には平穏だった。

その日が来るまでは。

深夜。

ふと初音は目を覚ました。

人の気配がする。

ぼんやりしていた頭が次第に覚醒初めて、恐怖がせりあがる。おそろおそろ薄目を開けると、男がいた。

全裸で、初音に向かってゆっくりと手を伸ばしてくる。

……あたし、窓、閉めてなかった……！

恐ろしさの余り体は動かない、手は近づいてくる。

「……助けて」

振り絞った声は小さくかすれていた。

「……助けて、直隆ッ!!」

「わしじゃ」

意外と近い所から声がした。

「んっ!？」

改めて、目の前の全裸変態野郎をまじまじと見る。

「あの、つかぬことをお伺いしますが」
信じられない。

「あなた、松本四朗直隆さん？」

「いかにも」

「ぱあん!!!」

瞬間、痛々しい音が鳴り響き、直隆は頬を打たれて片手をついた。

「何をする!」

「こっちの台詞じゃあ!! チビのくせに何でかくなってるの!!」
「!」

「わしが知るか!」

久しぶりに交わされる The 怒鳴り合い。

信じられないチビのくせにチビ言っないきなり殴るとは卑怯者め誰が卑怯者だゴラアば! かば! か。

まるで出会ったころのようね、うふふ。なーんて微笑み会っ余裕は

二人にない。

特に初音は半乱狂である。

「もう、もう、もう！　びっくりしたんだから！　死ぬほど怖かったんだから！！」

枕を武器に、ぽかすかと殴りも入る。

「こら、ばか、やめ……ぶふっ！」

騒ぎが収まったのは三十分後。

「と……ともかく」

息を整えて、初音はベッドから降りた。顔を真っ赤にさせて、直隆を見ない。

「なんか着るもの……。あたしの服であるかなあ……」

小さく呟きつつも、クローゼットの扉に手をかけて、そのまま凍りついた。

直隆に後ろから抱きすくめられたのである。

「……嫌か？」

耳元で囁かれた瞬間、ぞくりと何かか動いた。体中の血液が鳥肌を立てたような感じ。

何を問いかけているのかは分かる、男の手は欲望を孕んでいる。

「い……」

そして自分の声が、あまりにも小さく甘えが含まれていることに驚いた。

「嫌じゃない……」

——春の臍、静かに重なり沈む影が二つ。

とは、問屋が下ろさなかった。初音が。

「だあっ!!」

可愛い声を上げていた腕の中の女に突然突き飛ばされ、直隆はベッドから転げ落ちた。

「な……どうした」

「いいから！　すぐ戻るから！　そのまま待っていて！　ステイッ！！」

怒鳴りながら全裸の上にコートを羽織り、財布を引っ掴み、そのまま外に飛び出してしまった。

「何をやっておるんじゃ、あいつは……」

茫然と取り残された直隆は訳が分からない。

変質者（マッパオンコート）同様の初音は、最寄りのコンビニへと飛び込み、目当ての品（明るい家族計画）をレジに叩きつけ「シールでいいです」、びびった店員の「頑張ってください！」声援（敬礼付き）を背中に聞き、再び直隆の元へと帰ってきた。

「待たせたな」

目が据わっている。

まるで荒野の決闘に挑む荒武者のようだ。

背後には幻覚か、荒れた大地に乾いた風が吹いている（ヒューー）。

その目で直隆を見下ろしながら、初音はコートのボタンをゆっくり外していった。

ばさりと宙に投げ捨てる。

気弱な草食男子なら悲鳴を上げて逃げたかもしれない。

だが、直隆は戦国の男だった。

「待ちくたびれたぞ」

にやりと笑う。そして白く細い腕を掴み、乱暴に引き寄せた。

こうして現代東京における合戦（ピンポイント限定）の火蓋は切つて落とされた。

おちる

あの馬鹿。

売り場のカビ臭いストック、作業台に突っ伏して初音は悪態をついた。

腰が砕けそうに痛い。歩くことすら辛い。

あいつはさかりのついた犬か。兎か。

一晩五発ってどんだけ絶倫なんだ、殺す気か。

今朝がた、貞子のごとく這いずるようにベッドを出た初音に対し、直隆は元気いっぱいだった。再びベッドに引きずり込まれるところだった。

勿論、渾身の力を込めて殴ってやった。

「覚えていろよ」

堪える様子もなく、ぶん殴られた頭を抑えて、直隆は笑っただけだった。

直隆の手は。

台上に頬を付けたまま、目線の先にあるテープカッターをじっと見つめる。

直隆の手は大きくて、予想もしない所から伸びてきた。だから余計に快樂に翻弄された。

初音は男を知っている。

片手で数えるほどとはいえ、今までに付き合ってきた彼氏もいた。体も重ねた。

故に分かる、相性というものを。

やばい。

青いテープカッターを凝視したまま、小さく息を吐いた。

やばい、落ちてしまった。

昨日の記憶を何度も反芻するのは、きっとそのせいだ。
胸がきゅっきゅう切なく痛むのは、きっとそのせいだ。

あーもう！ 仕事中に何考えているんだか！

「店長、大丈夫ですか？ しんどかったら、僕、通しするんで帰り
…何してるんですか」

ストックに顔を出した林田健二は、何かを追い払うように両手を振
っている初音を見て目を点にした。

「なんでもない、大丈夫。少し休んだら楽になったから」

無理やり笑顔を見せて、椅子代わりの脚立から立ちあがる。

再度、激痛が走った。

その頃、直隆はベッドに腰をかけたまま、じっと手を見つめている。

直隆。

初音は繰り返し自分の名を呼んだ。
熱い吐息と共に。心がよじれるほど切ない声で。

その声が聞きたくて聞きたくて、何度も初音を求めた。

直隆。

未だ耳に残っている。

まだ聞き足りない、もっと欲しい。

それは自分の体が元の大きさに戻ったことよりも衝撃だった。
軽い気持ちのつもりだったのだ。

いつも威張りくさって玩具にしてくれる女に仕返しをするぐらいの、
それが。

別に初めての行いではない。妻もいたし、城下の遊び女と関係した
こともある。

それでも、あんな声で、あんな貪欲に快楽を求める女を直隆は知ら
なかった。

危険だ。

手をじっと見つめながら、直隆は小さく息を吐いた。

危険だ、これ以上行つてはいけない。

頭では理解していても、心は正直だ。

その証拠に狂おしいほど初音を待ち焦がれている。
早くあの扉が開かれることを、待ち焦がれている。

それから

自宅への道を初音はノロノロと歩いている。その横をおばあさんが、カラカラを引きながら通り過ぎていった。

大型スーパーに寄ったり、いつもは見向きもしない花屋をのぞいた。もう行くところはない。

あとはお家へ帰るだけ……なのがつっても億劫だった。

直隆と顔を合わせるのが恥ずかしくて仕方ないのだ。昨日の出来事を脳内で再生するたび、ときめいて胸が痛んで、困る。大切なものを触るように、そのくせ今までの男とは比べ物にならないほど、激しく初音を攻め立てた。自分を見る直隆の顔、息遣い、肩のライン、大きな手。

もう、いてもたってもいられなくて、この場で叫んででんぐり返しをしたいくらいだ。両手にスーパーの袋持っているから無理だけど。ちよっと前までは、そんな事無かったのに。直隆がチビの時は、早く帰りたくて仕方が無かった。

玄関を開けて、「ただいま」という瞬間のやすらぎは、今日とはとても見込めそうに無い。

それでも初音の足は、一步一步確実に向かう。男の元に。本人が思うよりも浮き足立った足取りで。

「ただいま……」

伺うように扉を開けると、部屋の奥、ベッドに腰掛けた直隆がはつとしたように顔を上げた。

室内は電気がついており、いやがおうでもその肢体すつぽんたいが目に入る。

純真な乙女のごとく、初音の顔が赤くなった。乙女はそのまま視界に入れないように廊下を蟹歩きして、スーパーの袋を差し出した。

「服……買ってきたから……サイズ合うかどうか分からないけど……」

蚊の鳴くような声で「こによこによと呟く。

「……かたじけない」

こちらもどう反応したら良いのか分からぬ風情で、蝶の羽音のような声を出した。

しばらくがさごそ、もそもそ、と音だけが室内に遠慮がちに響く。

初音は凍りついたようにそつぽを向いていたが、

「珍妙じゃ」

直隆の声に振り向き、ふきだ噴出した。

とりあえずの。ニクロで揃えたそれを直隆はエキセントリックに着こなしてた。チノパンの上にはいたボクサーパンツ。羽織ったジャケットはなぜか前後ろで、その下は長袖Tシャツが中途半端に引っかかっている。

「違うよ、直隆。そうじゃなくて……」

思わず腕に手をかけた瞬間、目と目が合った。どちらが先に動いたのかは分からない、気がつけば初音は直隆の腕の中にいた。

その先は、もう自然の成り行きである。

店長、彼氏が出来たんだろうな、きっと。

そしてラブラブに違いない。と、林田健二は笑いをかみ殺す。

最近、初音は壮絶な色気を醸し出すようになった。

本人は普段通りにしていても、雰囲気で分かる。

演出される色気よりも、無意識の色気の方がより強烈なものだ。

その証拠に、しばらくご無沙汰だった柏木もちよくちよく売り場に顔を出すようになった。

あの不良親父め。

「こちらは色合いが控えめですし、一年中飾っていただけますよ」

接客をしている初音の後ろ姿を見ていた健二は、その首筋に赤い点があることに気が付いた。

店長おおお！

何ちゅうもんを付けてるんですかあああ！

キスマークは独占欲の表れだと聞いたことがある。

自分の印を相手に刻むわけなのだから。

彼氏さんは独占欲の強い人なんだろう。そして初音はその男にメロメロなんだろう。

エッチだな。

素知らぬ顔をしながら仕事をしている初音の服の下には、男に付けられた印が無数にあるに違いない。

店長、滅茶苦茶エッチです。

面と向かって言ったら、初音はどんな顔をするのだろうか。

桜散るころ

直隆が普通サイズになってしまい、初音の日常のリズムは大きく変わった。

まず、裸同然でウロウロするのが恥ずかしくなってしまった。

ブラを脱いで挑発など考えられない、そんなことしたら、頭からペロリと食べられてしまう。

次に、食費の負担が大きくなった。これは致し方ない。それにしても、良く食う。

直隆は初音が仕事に言っている間、外を歩き回っているらしい。

テレビ三昧の生活よりも健全だと思わないでもないが、迷子になったらどうする。ろくに住所も言えない男なのだ。

「心配するな」

あっけらかんと直隆は言った。

「駅にさえ辿り着ければ、後は分かる。子供扱いするな」

「変な人に声かけられても、付いて行っちゃ駄目だからね。危ない人たちに絡まれたら、一目散に逃げてね」

「絡まれると言えば」

思い出したように直隆は、空を見た。

「渋谷というところでちーまーなる人種に絡まれたことがある。あれは一種の物乞いか？」

「……あんだ、歩いて渋谷まで行っただの？」

何時間歩いたんだ。

「うむ。金など持っていないと言ったら、初めは疑っておったが、本当に持っていないと分かると、逆に同情されて、これをくれた」

ぺらりと見せられたのは、千円札だった。

直隆は直隆なりに遅しく日々を過ごしているらしい。

テレビのおかげか情報も豊富だ。若干、偏りもあるが。

また、直隆は台所に立つことを極端に嫌った。

武士のする事ではないという。おかげで「お家に帰ったら温かいご飯が待っている、さあ直隆を教育しようプロジェクト」は夢と潰えてしまった。

生活は大きく変わった。

わずらわしいことだけではない。

自分の存在を認めてくれる人がいること。

自分を求めてくれる人がいること。

その人と一緒に過ごせること。

遅い腕の中で、初音はうつとりとため息をつく。

色が付いていたらきっとバラ色だったろう、幸福のため息だった。

この世界は、色で溢れている。

いつかの丘の上の公園で、コーヒーを飲みながら直隆は町を見下ろしている。

都心に出れば、どこから湧いて出たのかと思うほどの大勢の人がいたし（最初、直隆は合戦でもあるのかと思った）、髪の色すら取り取りだ。

初音が仕事に行くと、直隆は外を歩く。

近所をおおかた征服したあとは、テレビでよく言われる地名の場所に行きたくなった。

電車には乗らない。

人間、足という便利な物があるではないか。

勿論、最初の内は戸惑った。

道を尋ねても逃げられてしまったり、逆にどこぞの家に連れ込まれ

そうになったり（いい年した親父だった）。

喉が渴いたので民家に茶か水を所望しようと思ったら、大騒ぎになつてしまい警察を呼ばれそうになったり。

そしてなにより平和の恩恵を受けていることだ。食うに困ることは無いほどの食料がある、過剰なほどだ。だからなのだろうか、直隆は「大男」と呼ばれるほどに背が高かったが、ここではむしろ標準らしい。道行く人々も体の骨格からして違う。

直隆は一つ一つ、学習していつている。

この時代に来た当初の苛立ちや違和感は少しずつ薄れてきていた。うらかな青空の下、町の隙間をぬって電車が走る。

民家の屋根は日に反射してきらきらと輝く。

少年と少女が手を繋いで直隆の後を通り過ぎて行った。

あの手を繋ぐという行為。

どうも気恥ずかしいが、今度初音にしてやろう。

きっと、嫌がるふりをしつつも、頬を染めて喜ぶだろう。

満開の桜が、葉桜へとなり始めたころ、初音と直隆はお花見へと出かけた。

「名所といえば六義園でも浜離宮でも代々木でもあろうに……」

「いいの！」

というわけで上野公園に来ている。

ピークは過ぎたのか、それでもまだまだ桜を愛でつつもそろそろ歩きをする人は多い。

花見といえば上野、という初音の思考回路は、多分、小さな頃の記憶だろう。

まだいくつかも覚えていない少女時代、家族と共になんども来た。パンダと絶え間なく降り注ぐ桜の花びらだけが記憶の底に留まった。

大きくなったら大好きな人とここに来るんだ。

幼心の小さな決意はいつしか消えて、初音は大人になった。そして知ってか知らずか、男と二人、桜吹雪の中にいる。

「初音」

「ん？」

ふと手を絡められ、初音は口から心臓が出そうになった。直隆を見やると、赤い顔してそっぽを向いている。そのくせ手は離さない。

やだなあ、もう。手を繋ぐだけで、こんなに嬉しいなんて、あたしは中学生か。

大人の恋愛というものは、色々な物が付属してくる。

純粹や素直が美德になるほど生易しくはないお年頃。

保身、将来を見据えた駆け引き、いかに自分の値を釣り上げるか。それが楽しくもあり、煩わしい時もある。

だから、不意打ちに弱いのだ。

心の中で言い訳をして、大きな手を握り返した。

風が吹いて、花びらが舞う。

「美しいのう」

感嘆したように直隆が言った。

「なあ、初音。知っておるか？　美しい、はえーごでびゅーちふると言っのじゃぞ」

知っているよ、そんなこと。

苦笑と共に出そうになった言葉を、慌てて飲み込んだ。あまりにも

直隆の顔が得意げだったもので。

「へえ、知らなかった。直隆は物知りだね」

「全く、この世はびゅうちふるじゃ」

横にいる恋しい男は目を細めて、嬉しそうに微笑んだ。

あなたが横にいただけで、世界は美しく輝いてしまう。

思春期の熱に浮かされたような気持ちで初音は思う。

ストーカー

「ありがとうございました。またどうぞお越しくださいませ」

九十度のきれいなお辞儀をして、客を見送る。その姿が消えた瞬間、初音と林田健二は同時にストックに飛び込んだ。

「やったあ！ ついにペルーノがお嫁入り！」

「店長、かつこいいです！ かつこよすぎです！ 惚れてしまいしまいそうです！」

手に手を取って、キヤアキヤアはしゃいだ後、万歳三唱を繰り返す。この半年間、右にも左にも動かず見向きさえされなかった渦巻ペルーノがついに売れた。

ツキ、というものを初音は信じている。

今日はいい客に当たる日だとか、なぜか直前で逃げられてばかりだとか。販売に置いてツキに左右される場合は良くあることだ。

勿論、それだけが全てではない。

客は無意識に販売員に信用を求めるし、その為にスキルが必要な時は大いにある。

それにしても、初音はここ最近ツイている。

今まで石のごとく動かなかった十万、二十万の絵画たちが羽でも生えたようにポンポン売れていくのだ。

勢いに乗った初音に続けとばかりに、健二もガンガン売ってゆく。

今月予算は軽くクリアしてしまったし、本社からお褒めの電話まで頂戴した。

「ああ、今月の店長会は肩身の狭い思いをしないで済むわ」
満足げな溜息をつきながら、ストックの扉を開けた。

初音の勤める会社は、北は北海道から南は福岡まで全国二十店舗の売り場を持っている。営業スタンスとして全て百貨店に店子として入っており、月一度の店長会では全国の店長が本社にて集い、会議が行われる。

「金曜ですよね。頑張ってください」

「うん。気張ってくるわ。あ、林田君、そっち持つて」
配送予定のペルーノをこれから梱包しなければならない。

「林田さん」

早番の初音が上がった後、日計表を書いていた健二に美園明美が声をかけた。

「なに？」

顔を上げると明美は言いにくそうにもじもじしている。

「どうしたの？」

「実は……」

日本橋山中屋の従業員出入り口は一つしかない。そこで森田譲司の姿を最近、しょっちゅう見かけるといふ。

「店長に電話番号わたしていた迷惑男です」

まるで誰かを待っているように、レールにもたれて出入りする人々をじっとみていたらしい。

「なにそれ」

さすがに健二は声を上げた。もしかしてそれは

「ストーカー？」

「店長は全然気が付いていないみたいだし、どういったらいいか分からなくて」

「いや、それは早く言わなきゃだろう」

健二もまったく気が付かなかった。多分、毛嫌いしている明美だからこそ気が付いたのだろう。

「電話する」

会社の子機から初音の携帯番号を検索する。だが、受話器の向こうから聞こえたのは「ただいま電波の届かないところにいるか……」
無機質なアナウンスが流れるばかりだった。

「きつと、電車だからですよ。メールしてきます」

不安そうに明美は言って、自分の携帯を持ってストックに消えた。

そうだといいんだけど。

なんだか嫌な予感がする。健二は無意識に左腕をさすった。極寒地域にいるみたいに鳥肌が立っていた。

ゆれる電車の中、初音は携帯を開いて電源が切れていることに気が付いた。

朝、充電するのを忘れていたらしい。まあ、そんなにしょっちゅう鳴るものでもないし、と呑気に夕飯の献立に頭を切り替える。

今日はカレーにしよう。直隆の好物だ。カレーとかハンバーグとか、子供みたいなのが好きなものだから、と苦笑しながら玄関を空けた瞬間だった。いきなり後ろから羽交い絞めにされて、ものすごい勢いで玄関横の台所に押し倒された。

「きつ……！」

口を大きな手で塞がれる。恐怖が脳天を貫いた。

直隆、直隆、助けて、怖い！！

ドストドスという音の後に、のしかかっていた力が緩まる。

「ぐげっ！」

男が悲鳴を上げた。直隆がその頭を蹴り上げたからだ。腰が抜けている初音を引き離すと、台所にあつた包丁を直隆は取った。よどみの無いその行動に、今度は初音が悲鳴を上げる。

「だめ！ 直隆！」

「警察、呼びました！」

ドアが開けっ放しになっていた。騒ぎは階内に筒抜けで、数件がドア越しに様子を伺っている。その内の誰かが通報してくれたらしい。男は呻きながら直隆を睨み付けていたが、警察の言葉に身を翻して逃げて行った。

「怪我はないか」

「あ……うん……」

立ち上がるうとしても、体に力が入らない。

「無理をするな。わしがここにおる故」

今は、あなたが怖い。ショックの抜けない体で、初音は小さく震えている。

警察を呼んだという声がなければ、あのままいつていけば、直隆は間違いなくあの男、森田譲司を殺していた。ためらいの欠片も無く、直隆は戦国に生きていた。戦が当たり前にある時代、人を当たり前に殺す時代に生きていた。

落ち着かせるためか、直隆は初音の頭を撫でている。その顔は心底心配そうで、迷子になった子供のように頼りない。

ああ、でも。初音の頬を涙がボロボロと伝ってゆく。

あたしはこの人が好きだ。理屈とか能書きとか全てを抜きにして。

「直隆」

その肩に頭をもたせ掛けると、大きな腕が回った。

「守ってくれてありがとう」

「わしは初音の内藤であるからの」

騎士ナイトといいたかったらしい。初音は少しだけ笑って目を閉じた。

あつさり警察に捕まった森田譲司は、脳内で夢の青写真を描ライフプランニングいていたそうだ。

「東京のど真ん中で、運命の再会を果たしたもんだから、もう結婚する気でいたんですって。仕事もうまく行ってなかったみたいだし、変な方向に現実逃避しちゃったんでしょね」

担当した婦人警官はそういった。

「自分の都合しか考えないで、それを他人に強制する。叶わなければ実力行使にでる、もしくは世間や人のせいにする。変な大人が増えてやんなっちゃうわ」

人のことは言えない、と初音は内心呟いた。自分だって多かれ少なかれ、そう思っている。

弟君 襲来

わたしにとって男は最高の毛布よ。

どこか外国の女優が雑誌のインタビューでそう答えていた。読んだときはしゃらくせえとしか思わなかったが、なるほど、なかなかどうしてこの場所は心地よい。

「重い。直隆、ちよつと重いー……」

胸元でクウクウ寝息を立てている直隆の頭をどかそうとすると、そのまま絡み付いてきた。

「ちよつと、くすぐつたいって……、もう!」

半分夢の中に片足をつ突っ込んでいるようなまどろみと、男の体温の気持ちよさに幸せを感じながら初音もじやれつく。

「どこがくすぐつたいって?」

直隆が笑いながら覆いかぶさってきた。寝ばけた顔も可愛いなあ、それにしても朝っぱらから元気だなあと感心しながら初音はその顔を引き寄せてキスをする。ゆっくりと手を回すと、直隆の固くて太い髪の毛を梳いた。

そのままラウンドワン開始となった時。

ピンポン。

間抜けなチャイムが鳴った。

ワンルームマンションはことのほかこの音が大きい。一瞬、二人はビクツとして、顔を見合わせた。

「小包でもきたのではないか」

「朝の七時に?」

ピンポンピポピポピンポン。

せわしなくチャイムは鳴り続ける。ご丁寧^{ごていねい}に音声まで付いてきた。

「姉ちゃん、おれだよ、まーさーはーるー!」

「げっ!」

初音が顔色を変えて飛び起きた。弾みで直隆がベッドから転げ落ちる。

「どうしよー、どうしよー、正晴が奇襲攻撃かけてきた、ぱんつはどこー!?!」

「なに、奇襲とな。正晴とやらは敵か味方か」

オロオロしながら下着を探す初音に、直隆もつられてパニックになった。

「正晴はあたしの弟です。ああ、あの子口うるさいから、絶対怒られるー!」

「姉ちゃん、いるのは分かってんだよー」

ドアの向こうから朗らかな声で、高利貸しのような恫喝^{どくわ}が聞こえた。

「後三十秒で開けないと、合鍵で強行突破しちゃうぞ」

「ひいひいひい!」

昨夜脱ぎ散らかしたパジャマを着込んだ初音は、とりあえず下着だけ着た目の前の男が一番問題だと気が付いた。

「弟君^{おにいさま}か。ならばしかるべき挨拶をせねば」

とかなんとかぶつぶつ呟^{つぶや}いている直隆をベランダにペーいと放り出してがしゃこんと鍵をかける。

「何をする!」

「ちよとだけ! ちよつとだけそこで我慢していて!」

拝むように両手を合わせて、無常にもカーテンを閉じた。

「ど、どうしたの正晴。久しぶり」

二年ぶりの再会に姉弟はにっこりと微笑み合った。一人は引きつりながら、一人は嬉しそうに。

「一時帰国したもんでさ。すぐに姉ちゃんに会いたかったんだ」

「姉ちゃんも正晴に会えて嬉しい。じゃあ、そういうことで、さようなら。またいつか」

閉めようとしたドアはガンと音を立てて止められた。正晴のダークブラウンの靴が挟まっている。

「はるばるアメリカからきた弟にそれはないんじゃないの？ 五分だけでいいから中に入れてよ」

そういつて無理やり押し入ってきた。

初音は昔からこの弟に弱い。姉思いといえば聞こえはいいが、あまりにも干渉が多すぎるのだ。

昔から。

「あなたが心配なのよ」と母の言葉もあって、強く拒絶できない。

「ねえ、あの……うちの合鍵って本当に持っているの？」

「うん！ 前、泊まらせてもらったとき、勝手に作らせてもらったよ。世の中何かと物騒だからね」

お前が一番物騒じゃ！

初音は絶叫を辛うじて飲み込んだ。

「いやー、やっぱり日本は湿気が多いねー。アトランタなんてさ、経度日本と一緒になのにさ、今の時期すでに半袖半パンなんだぜあいっつら……」

ぺらぺらとしゃべっていた正晴がふと止まった。

「姉ちゃん、あれなに？」

「げっ！」

弟が指差す方向を見て、初音は悲鳴を上げた。

朝光を受けたクリーム色のカーテンに影が映っている。まるで車に引かれたカエルのような形の。

状況を飲み込めない直隆が窓ガラスにへばりついて様子を伺っているのだろう。

「姉ちゃん」

正晴がこちらを向いた。顔は笑っているものの、その背後では風神様雷神様がダブルで激しくツイスト中。

「説明してもらおうか」

姉弟バトル

ローテーブルを挟んで、服を着た直隆と初音、そして向かいに正晴が座る。その背後で風神様雷神様も意気込んで着席した。

お前ら俵屋宗達の屏風に帰れ！

初音は幻に毒づく。

口火を切ったのは直隆だった。

「お初にお目にかかる。某は浅井新九郎長政に仕えし松本惣一影康、その一臣松本四朗直隆と申す。以後お見知りおきを」

そう言つて深々と頭を下げた。

「何？ 演劇の人？」

目を丸くさせている正晴に、初音が慌てて頷いた。

「そ、そう、役者の卵！ 右から見ても左から見ても怪しい所なんてないでしょ！」

「何をいつておる、わしは……」

あんたは黙つてろ！ 凄んだ初音の眼力に気おされて直隆が口を閉じた。

「へえ、役者の卵。じゃあ、収入とか全然ないんだ」

正晴の目が細まる。

「もしかして……姉ちゃんがやしなつてんの？」

「いいんだつて、直隆は！ あたしが好きでやっているんだから！ はああ、しまったあ！ これじゃ直隆がヒモのようではないか。いや、実質その通りなんだけど！」

「そういう正晴はどうなのよ。浮いた話一つ聞いたことないけど、姉の心配している場合？」

「顔も性格も将来性もいいんだ。モテないわけないだろう。一人に絞り込めないだけで」

「へえ、それは結構なことだ」

「話をすり替えるなよ。それとこれとは違うんだ……姉ちゃんさ」

弟はしみじみと溜息をついた。初音は次の攻撃に身構える。

「いい年なんだから、もつと堅実に考えるべきだ。夢ばかり見ていないで未来を見据えないと取り返しのないことになるぞ。時間は戻ってこないんだから」

正論だと思った。正論だと思って腸が煮えくりかえった。

「泣きを見る羽目になるのは、結局、姉ちゃんなんだぞ」

「それがどうした!!」

いきなり怒鳴りつけられて、正晴は驚いて腰を抜かした。その後ろでは風神様雷神様が手に手を取り合って口を〇の字に開けている。

「計算ずくで何もかも幸せになると思ったら大間違いなんだから! あたしの行動はあたしが全て責任を取ればいいだけの話でしょう、何も知らない正晴が横からごちゃごちゃ言わないで!」

「言うよ! 当たり前だろう、姉ちゃんが心配なんだから!」

姉と弟は睨み合う。

「顔だけのヒモとはすぐに手を切るべきだ」

「それ以上、直隆を侮辱したら」

怒りが極度に達したのだろう。初音の声がずっと低くなった。顔から表情が消えて、変わりに目が燃えるように光っている。

「あたし、本当にあんたに何をしでかさか分からない。だから、帰って」

「初音、落ち着け」

今まで入り込む隙もなく、テニスのラリーを見守るが如く、初音と正晴を交互に見ていた直隆が初音の肩に手を置いた。

思ったよりも力強い手だった。その部分から、燃えるように渦巻いていた感情がシュウシュウと沈静化されてゆく。

そのまま、直隆は正晴に顔を向けた。

「少し外を歩かぬか」

丘の上の園

正晴は黙々と歩く。自分から口を開く気はなかった。目の前を歩く姉の恋人も、自分が誘ったくせに何もしゃべらない。

不愉快と好奇心が絶妙にブレンドされた気持ちのまま、正晴は全身でその男を観察した。

変な奴。

周りの雰囲気にも馴染んでおらず、どこか浮世離れた気配がする。ただ前を見て歩いている、それだけなのに。

落ち着いて見えるが、導火線に火が付いたら命すら投げ出して突き進む様な危ういタイプだ。

正晴は自分の嗅覚を信じる。

ま、初音はその男をパンツ一丁でベランダに叩きだし、正晴は本人の前で「ヒモ」呼ばわりした訳だが。

正晴は小さな溜息をついた。

昔から姉が好きだった。今でも一番の理解者だと自負している。

近所のクソガキにいじめられて泣いている姉を守ったのは自分だったし、不器用な姉が親と衝突しそうになるたびに軽口で風通しをよくするのは正晴の役割だった。

だが、いつしか姉は鎧を纏うようになった。誰にも本心を見せず、危うさと頑なさを抱えて鎧はどんどん分厚くなる。比例するように正晴の文句も増えてゆく。

「よい眺めだろう」

直隆が立ち止ったのは、丘の上の公園だった。見晴らしがよく、眼下にはジオラマみたいな町の風景が広がっている。

「そうだね」

いつの間にか買ったらしい冷えた缶コーヒーが差し出された。金の出所は初音だ、突っぱねたかったが、喉が渴いていたので黙って受け取った。

なんとなく二人並んで、ベンチに腰掛ける。

どうせ言い訳とか、どれだけ姉が好きだとか言い始めるんだろうと構えていたが、隣の男は何も言わずにコーヒーを飲んでいるだけだ。正晴も黙っていた。

サワサワと風が通り過ぎて、梢こしげを揺らす。

「何か、僕に言いたい事あるんじゃないの」

しばらくの後、耐えられずに口を開いたのは正晴だった。

「一度、初音の弟君に会ってみたかった。話をよく聞いていたものだから」

姉ちゃん、それ反則——！

心の中で正晴は叫ぶ。

「ど、どんな？」

上ずった自分の声が忌々しかったが、直隆は気にしてないようだった。

「いじめっ子から震えながら守ってくれたとか、辛い時はそばにいてくれたとか、……名前を聞いたのは、今日が初めてだったが」

缶コーヒーに目を落としたまま、直隆は続ける。

「初音の強さは、正晴殿がおればこそ生まれたのではないかと思う。人は愛情に恵まれて育つと強くなるものだから」

「姉ちゃんが本当に強いと思ってんの、あんた」

そう見せかけた鎧を着こんでいるだけだ。本当の初音は弱く、脆い。「強い」

だが、直隆は即答した。

「そこが堪らなく愛らしい」

言った瞬間、直隆の顔が真っ赤になった。

赤くなるくらいなら言うんじゃないよ。

むかつ腹と笑いだしたくなる衝動を抑えながら、正晴は空き缶をゴミ箱に投げ入れた。

マジで変な奴。

分かっていて。本当は分かっていた。

正晴だって子供じゃない。大好きな姉の恋人に嫉妬しているだけだ。それが隣の男でなくて、バリバリのエリートだとしても、正晴は絶対に反対していただろう。

「あんたがさ」

ベンチから立ち上がると、近くにいた鳩が慌てたように飛び去った。

「もつと嫌な奴だったら良かったのにな」

そしたら思う存分嫌ってやれるのに。

「もう、遅い」

部屋で待っているのは耐えられなかったのか、初音はマンションの前におり、帰ってきた二人を見つけて飛び出してきた。

「何の話をしていたの、ねえ」

初音の問いかけに正晴と直隆は目を合わせた。

「いや、別に」

「男同士の話」

「だから男って嫌。すぐに仲良くなって結託するんだから」

むくれた姉に正晴は声を上げて笑う。

「じゃあ、そろそろ行くよ。姉ちゃん、たまには実家に帰ってやれよ。父さんも母さんもさみしがっている」

「う、うん」

そのまま正晴は踵を返した。

直隆には挨拶も何もしなかった。拗ねているのは分かっていたが、振り返らずに黙々と駅を目指す。

「ふん」

うららかな午前の中、正晴は鼻を鳴らした。

「爺むさいしゃべり方しゃがって。武士かつーの」

悪態をつきながら、正晴は歩く。声にほんの微量の笑いが含まれている事を自覚しながら。

あいの世界

水族館に行きたい、と直隆が言った。

テレビで紹介されているのを見て、いてもたってもいられなくなつたらしい。

「こーんな巨大な透明の甕にな、取り取りの魚が泳いどるんじゃ。それを食わずに観賞するとは何という娯楽ぞ」

子供のように目をキラッキラさせて、身ぶり手ぶりを交えて説明する。

可愛いなあ。

つい初音は目を細めてしまう。

本人に言つたら怒るから言わないけれど。

「じゃあ、明後日行こうか。平日だから空いているだろうし」

「楽しみじゃのう」

嬉しそうな顔をして直隆は初音を抱え込む。

そうだ、と初音はあることを思いついた。そして苦笑する。

あたしは本当にこの人にぞっこんだ。

用事があるから水族館前で待ち合せよう、と初音は言った。

「電車でおいでね。歩いたら日が暮れちゃう」

とも。

不思議だ。

一緒に暮らしている女と外で落ち合う。

不思議で少しだけこそばゆい。と、頬を掻く。

電車は走る。

この銀色の箱の羅列を直隆は気に入っていた。リズムカルな振動も、どこことなく眠たげな人々の顔も、拳こぶしのきいたアナウンスも。

何より、飛んでいるようだ。地上を走れば景色は前から後ろへ次々に流れていったし、地下を走れば窓の外に広がる暗闇に心が躍った

（地下を走るといふ概念は衝撃だった）。

電車を降りて、ホームを歩く。

エスカレーターに足に乗せるとき、少しだけ得意になってしまう。動く階段に感動した直隆は初めて乗った時、バランスを崩してひっくり返ってしまい、降りるときは躓いてこけた。今では澄ました顔をしてスムーズに乗れる。

そこに立っている女を見た時、人違いかと思った。

周囲が霞むほど存在感を放っている女。

初音は着物を着ていた。

濃い藍色の袷で裾と袂には白波と可愛らしい異国の船があしらわれている。帯は渋い銀色でお太鼓の部分には二匹の小さな魚が躍っていた。

襦袢と帯締めを赤で統一し、白い半襟から覗くうなじが色っぽい。

いつも一括りにしているか、下ろしっぱなしの黒髪は高い位置で纏められており、それだけで別人に見える。

美人だ、と素直に思った。

着物姿が珍しいのか、道行く人はチラチラと初音に視線を向ける。

中にはうっかり見とれて恋人らしき女に引つ張られている男もいた。直隆は息を吸い込む。

自慢したかった。見も知らぬ周りの人たちに、あれはわしのものだ、いい女だろうと自慢したかった。

視線を感じて胸元に手をやったり、うなじをなでつけたり落ちつかない初音がこちらに気が付いた。

「遅い」

その声、その柔らかさ、その笑顔。

「悪い」

胸に満ち溢れる愛おしさを抑えつけて、直隆は歩き出す。

「着物を貸してくれるお店があるの。着付けもやってくれるんだよ。

水族館に行くって言ったらこんなコーディネートしてくれて…。変かな」

恥ずかしそうに俯いて初音は顔をほんのりと赤らめた。

「き」

きれいだ、という言葉が喉の奥に詰まって出てこない。賛辞は全て喉元を先頭に渋滞状態で、直隆はどうしたらいいか分からず困ってしまった。

「き？」

ああ、もうそんな顔で見上げるんじゃない。

「き…き…北国にも春が来たようです。と宇賀殿が言っておった。昨日」

はあ。初音はきょとんと直隆を見たままだ。

「やっぱり合わないか…」

あ、と直隆は思い当った。

初音は自分の為にわざわざ着物で来たのだ。着物を当たり前に来ていた時代の自分の為に。

溢れた愛おしさはもう零れている。

「そんなことはない」

乱暴に手を取りながら、直隆はそっけなく言った。

「今まで見たどの女よりも美しい」

なんちゅーこっばずかしいことをゆーとるんじゃないはー！

顔がゆでダコのように真っ赤になったのが分かる。

「さ、ゆこっ」

「う、うん」

初音の顔もこれまた真っ赤だった。

館内はガラガラで、時たまカップルや親子連れがちらりという程度にしか人はいなかった。

藍の世界だ、と直隆は思う。

昔、まだ少年だった頃、^{にあ}鳩の海で泳いだ。湖底まで潜って、水面を

見上げた時の色にそっくりだ。

「静かだね」

歩くには困らない程度の照明、朧に光る硝子ガラスの向こうに巨大な魚がゆっくりと泳いでゆく。

感嘆の声が出た。

こんな大きな魚をどうやってここまで運んできたのだろう。こんな大きな透明の甕かめをどうやって作ったのだろう。大変な作業だったに違いない。ただ、魚を観賞するためだけに。

それをやつてのける現代という世界を直隆は不思議に思う。

「直隆、見て見て。ほら可愛い」

手を繋いであちらへこちらへと進んでいくうちに、初音がはしゃいだ声を出した。

「…けつたいな魚じゃのう」

「ペンギンだよ」

子供の様な熱心さで硝子に手をくつつけて、ペンギンとやらを見ている初音はいつもとはまるで異なった。

この女はいつもわしを振り回す。

出会った頃も、そして今現在も。無意識に、ただその存在が。

「直隆、しんどいの？」

南国の熱帯魚が泳ぐ水槽前で、初音は横の男を見上げた。

こういう時、大概はしゃぐのは直隆の方なのに。と黒い瞳で問いかける。

「それとも酔った？」

心配そうにのぞきこむ初音の顔は、硝子から発光される淡い光に照らされて、儚く幻想的に見えた。

「初音」

「ん？」

「わしはそなたに惚れておる」

先程とは違い、言葉はするりと出てきた。

ゆっくりと直隆の唇が近づく。初音は一瞬ためらったが、目を閉じ

て素直に受けた。

ふれあうだけの優しいキス。

分厚い硝子の向こう、色とりどりの魚たちが横切って行った。

その夜。

ケータイの着信音で初音は目が覚めた。

部屋の中には二人の服が散乱しており、直隆は初音を後ろから抱えたまま、静かな寝息を立てている。

「…はい」

「林田博です」

「あっ！」

直隆の調査を依頼したまま、すっかり忘れていた。

「お久しぶりです、お元気で…」

「松本四朗直隆は」

初音の声をさえぎって、博は言った。

カチツと音がする。

「姉川の戦いで死んだ」

蛙はねがう

「長浜に松本家ゆかりの寺があつてな」

フロントガラスから見える灯の羅列は規則正しく流れてゆく。

ふ、と煙を吐くと博はつづけた。

「松本四朗直隆は姉川合戦の一カ月ほど前にひよっこり帰ってきた、と文献にも書かれとりました。一応デジカメで撮ったんですけど、送りましたか」

いいえ。

ケータイの向こうから小さく硬い返事が返ってきた。

「十分です。林田さん、その戦の一月前に直隆は過去に戻ったんですね」

「せや。姉川合戦は……。おい、梅木、いつやったつけ」

「ユリウス暦で六月二十八日です」

博の横で同じく煙草を吸いながら運転していた梅木が答えた。

「六月二十八日やと。やから五月の終わりくらいやな。直隆が消えるのは」

「……ありがとうございます」

悲しげで気丈な声だ、と博は思う。

「また改めてお礼を言いに京都へゆきます。お忙しい中、お時間を割いていただいてありがとうございます。良かった、言ってもらえて」

「あの、木村さん」

通話は途切れてしまった。よほどショックだったんだろう。

パチンとケータイを閉じて、頭をガリガリと搔く。

やっぱり電話しなきゃよかったかも。いや、これで良かったんだ。

あのチビ侍と木村初音が今はどんな関係にあるのか、博には容易に想像が付いた。

お互いがお互いを必要とする存在になっているに決まっている。

「先輩。『姉川の戦い』スよ」

「ああ？」

しばらくの沈黙の後、梅木が口を開いた。

「『姉川合戦』は徳川の言い方ス。間違えんといってください」

「お前は東が嫌いやからなあ」

「アイヘイトクガワイエヤス」

「そうかい」

「けど、先輩。あのおっさん、絶対何か隠してますよね」

「せやなあ」

梅木の協力の元、様々な文献を漁ってみても松本四朗直隆のまの字も見当たらなかった。ので、大学名を出して滋賀の歴史資料館に連絡を取ってみたところ、あっさりと糸口が見つかった。

「長浜に恩念寺という寺があります」

電話口に出た若そうな女は丁寧とその寺の住所と電話番号まで教えてくれた。

「あたしの家は、その寺の檀家なんです。びっくりしました。てつきり…」

「あ、いえ、何でもありません。よければそちらに問い合わせてください」

博以上に乗気だったのは梅木である。

ほとんど引きずられる形で滋賀くんだりまでやってきた。

住職は恰幅のいい中年男で、気前よく寺に伝わる数々の文献や資料を見せてくれた。

梅木が狂喜乱舞したのは言うまでもない。

「松本四朗直隆は浅井長政の家老、松本惣一影康の四男でしてな。戦に行く直前にここを訪ねてこられた。記載は多くはないが、神隠しにあつとつたらしい。姉川では磯野員昌と共に蒙戦したと記されておる」

「これだけの資料をなぜ公開せんのです」

興奮状態の梅木に詰め寄られ、住職は鼻を鳴らした。

「なぜ公にせんといかんのや。うちらにはうちの守るもんがある、よそもんにとやかく言われとうないわ」

「せやけど…！」

「やめえや、梅木」

気が付けば、日はとつぷりと暮れていた。

最後に住職は言った。

「女性の方がいらつしやると思っておったが…」

ジロジロと博と梅木を見つめた後、いやいやまさか、と坊主頭を掻いた。

「俺は悔しいス。またピンであそこに行つていいスカ」

「ええよ、別に。俺にやもう関係ないことやもん」

そうだろうか。そうなんだろうか。あのハゲタヌキが言った女性とは、もしかしたら木村初音ではないのか。

「ねえ、先輩」

「なんや」

「俺、今日は興奮して眠られないかしんないス。デジカメの容量がもつと多かつたらなあ…」

確かに梅木は未だ興奮状態にある。いつもは大人しい男がよくしゃべるわしゃべくるわ。

「お前はほんまに好きなことを研究してるもんなあ」

「そうスね。俺は幸せもんやと思います」

しばらく沈黙が流れた。

「思っんスけど」

博が煙草に火を付けた時、考えるように梅木が言った。

「井戸の中の蛙、大海を知らずって言葉、あるでしょう」

「あん？」

「その後にされど空の高さを知る、って続くの知ってます？」

「あー。でもそれ、後世になつてから付けたされたものやろう」

「みたいスね。でも、俺はこの言葉が好きなんスよ」

「ふうん」

「井戸の中の蛙、大海を知らず。されど空の高さを知る。引きこもり学者の居直りとか言われますけどね。そんなんでも役に立つことあるやないスか」

「役に立つこと、ねえ」

「さつき、先輩が話していた木村さんの事を俺はよく知らないス。だけど、真実を伝えることができた。いいやないスか。それで」

「せやな」

この先、初音と直隆は離ればなれになる。直隆が死ぬことを自分は初音に知らせた。

あの女はこれから待ち受ける不幸をどう受け止めるだろうか。

だが、何も知らずに受け止めるよりは、知っていた方がいい。

そう思うのは、もしかしたら罪悪感を少しでも減らしたいからかもしれない。

一寸先の闇

——松本四朗直隆は

「……むら」

姉川の戦いで死んだ。

「木村」

死んだ。

「おい、木村！」

足に強い痛みが走って、初音は我に帰った。

本社の会議室、十五人の店長たちと上司の視線が突き刺さっている。
店長会の最中だった。

「日本橋山中屋おまえの番だ、はやく立て」

初音の足を蹴りあげた隣の銀座店店長、船橋が小声で注意した。

「あ……、すみません」

慌てて立ち上がると、はずみで机上の資料が音を立てて落ちた。

「おいおい、大丈夫かよ」

かつての上司は手伝うそぶりもなく、資料を拾い集めている初音を眺めている。

駄目だ、あたし。すっかりしろ。

仕事なんだから、集中しないと。

焦る心は空回りを続けるだけで、林田博の声が思い出しくもないのにかぶさってくる。

——松本四朗直隆は……。

「すみません、お待たせしました。日本橋山中屋の今月度予算に対

し、達成率は――」

博の声を振り払って顔を上げる。

船橋は顎髭を撫でながら、そんな初音の様子を見ていた。

一方、その頃の直隆は、初音の売り場で珍獣の様に林田健二と美園明美に取り囲まれて往生していた。

初音がどんな所で働いているのか興味があってやってきたわけだが、

「店長、今日は店長会でいないんですよ」

健二は残念そうにそう言った。片や明美は

「あのストーカー男をもっと早く言ってくれば！ 店長に謝り倒しても笑って許してくれるだけだし、いっそ怒ってくれたほうがどんだけ楽か！ ごめんなさい、彼氏さん」

鼻息荒く頭を下げるのだった。

「そりや、美園さん、売り場のど真ん中で土下座して床に頭を打ち付けてたもんな」

「だって、だって」

じゃれあう二人に直隆は、ほのぼのと笑う。

「店長とはどんな所でデートするんですか？」

「店長って彼氏さんに甘えたりするんですか？」

「あだ名で呼び合ったりします？」

「店長、プライベートは仕事に関係ないって一切教えてくれないんですよ」

「あんなにクールでかっこいい人、他にはいないです」

今度はうごうごと直隆に向かってきた。無邪気かつ強烈な初音賛美に、直隆はどうこたえていいか分からずに困ってしまった。

「はい、お疲れー」

五つのジョッキがガチャガチャとぶつかりあう。

店長会の後、大概いくつかのグループに分かれて飲みに行くのが恒例であったが、初音は真っ直ぐ帰るつもりだった。飲んでなんかいられない。

「一杯だけ付き合え。話したい事もある」

と船橋に無理やり連行されて、今現在溜息をつきながらビールを流し込んでいる。

「今日もきつかったな」

「大体、本社のやり方がまずいんだよ。今時、現場に社員三人、アルバイト一人なんておかしいだろう」

「社長はそういうスタイルだからって頑なだしねえ。その内、絶対潰れるわよ」

不満は一気に流れ出る。

「日本橋山中屋は、随分と調子がいいじゃねえか」

船橋は初音が入社したての頃の店長で、初音は色々なことをこの人から学んだ。真似することも、反面教師なことも。

「一時的なものですよ。今のうちに予算取っとかないと。…あたし、そろそろお暇いそを…」

「噂なんだけどよ」

船橋は声を顰める。

「全国の山中屋から、六月に撤退するかもしれねえ」

「えっ…？」

初音は驚いて、船橋の髭の濃い顔を見た。

「まさか、そんな。上は今日、何も言わなかったじゃないですか。それに百貨店側も…」

「うちの常務が山中屋の幹部を怒らせたんだってさ」

あの親父か。癪の強い老人の顔を思い出して、初音は眉を寄せた。

「何があつたか知らねえし、あくまでも可能性の問題だ。だが、覚悟はしておけ」

「……はい」

可能性の問題。クビになるかもしれない。

そうだったら、どうすればいいのか。取りあえず、雀の涙とはいえ退職金は出るだろう。貯金もある。雇用保険もある。

その先は――。

体がすうつと冷えた。

あたしは仕事も男も失うのか。

――松本四朗直隆は姉川の戦いで死んだ。

「帰ります」

鞆を掴んで立ちあがった初音を船橋はもう引き止めなかった。

店を出て扉を閉めると、喧騒が消えた。

目の前は街灯だけが頼りなく光っている、ぼんやりした暗闇だった。初音は歩き出す。歩かねばならない、それがどこまでも続く闇の中だとしても。

怒りと焦燥

昼から夕に変わる時間帯は、テレビから流れる浮ついた騒々しさがよく似合う。

直隆は黙々と、洗濯物を畳んでいた。

唯一出来る家事であり、初音に仕込まれたものだ。シャツを丁寧に畳みながら小さなため息をつく。

最近、初音の様子がおかしい。

ぼんやりしていることが多くなって、時たまじつと直隆を見つめる。いきなり抱きつく。痛々しい顔をして溜息をつく。

一本芯が通っていて、いつもは何事にもゆるぎない女が。どうしたと聞いてみても、何でもないと言っばかり。

これはあれか。情緒不安定というのかも。それとも更年期障害か。昨今では若い女性にも多いとテレビでも言っているし。それにしても。

初音のパンツ（黒地にピンクのドット）を目の前に掲げて直隆は首を傾げた。

こんなに小さな布切れがよく入るものだ。と、それを畳もうとした時だった。

「……浅井長政、寝返ったり！」

テレビから突然聞こえた声に、びくんと体が反応した。術にかけられたように動けない。だが耳だけは妙にさえている。

「と、信長は怒り狂ったわけだ。でも長政にも理由があつたんだね。悩んだと思うよー。一方は義理の兄でありその勢力は巨大で味方にある限り安泰だ。もう一方は先祖代々の義理がある。どちらにせよ、長政のとつた行動は意外な所から信長の耳に入ることになる」

テレビの中の呑気な声は、緊張の欠片もなくぺらぺらと続ける。女の下着を手にしたまま、直隆は凍りついていた。

「1570年、信長は体勢を立て直して、家康と連合を組み北近江

へと出陣。対し浅井長政も朝倉氏と手を組み迎え撃つ。その舞台となった姉川を挟んで正面衝突、近くには血川、血原という地名が残るほどの激戦だったそうだよ。からくも勝利を得た信長は、しかし城を落とすまではいかなかった」

つつ、と汗が流れた。ゆつくりと頬を伝って、顎から滴り落ちる。

「三年後、信長は再び浅井朝倉へと攻撃を開始。八月二十四日、まず信長に追われた朝倉義景が自害。その三日後の八月二十七日、信長はついに浅井長政のこもる小谷城への総攻撃を始めたんだ。長政はお市と三人の娘を送り出した後、一人自害。その時なんだけどね、最後の攻撃の為、黒金御門から打って出た浅井長政は信長の兵に攻められ、本丸に帰ることができずやむなく重臣赤尾美作守の屋敷に入り自害した。たった160メートル先の本丸に戻ることにすらできなかった……」

「うわああああ！」

最初にやってきたのは怒りだった。混乱に任せ、テレビを殴りつける。

哀れなブ。ピアは激しい音を立てて床に落ちた。

丁寧に畳まれた洗濯物が散乱する。

自分は何をしているのだ。こんなところで何をしている。

過去を忘れ、女にうつつを抜かして。

己に対する怒りも静まらぬまま、次にやってきたのは焦燥だった。

気付けば直隆は散乱した部屋の中でうずくまっていた。

全身に汗をかき頭を抱えて、襲いかかる感情に耐えるようにうずくまっていた。

駅からの道を、ヒールを鳴らして初音は歩く。
カツカツカツとわざと音を立てて初音は歩く。

そうでもしないと、泣きだしそうだった。

直隆が消えてしまう。過去に帰って、そこで死んでしまう。家に帰ってあの無邪気な顔で出迎えられるのがつらい。

本人にはまだ何も言っていない。言えない。

ただ、ずっとずっと一緒にいたいだけなのに。

強い想いは瞬時に痛みと共に否定される。

違う。そんな美しい願いじゃない。

初音は知っている。自分の弱さを、醜さを。曖昧なまま、幸せに浸っていたかった。

何もかも濁して目を反らしたまま、直隆と二人の世界に浸っていたかった。

「ただい……ヒイツ！」

玄関を開けた初音は、猛突進してくる直隆にそのままタックルされてしたたか頭をぶつけた。

「痛！ ……ちよつと、直隆、頭打った……」

「教えてくれ」

初音の足にしがみついたまま、直隆がぐぐもった声を出した。

「初音、教えてくれ。浅井家は滅びたのか」

部屋の中はぐちゃぐちゃで、一瞬で初音は悟った。

知ってしまったのだ、直隆は。

「…滅びた。織田信長に攻め入られて」

直隆は無言だ。ただ、初音が痛みに顔をしかめたほど、巻きつけた腕に力を入れた。

「…大丈夫」

初音は息を吸い込んだ。

「直隆は過去へ帰れるんだよ、もうすぐ」

その夜更け。

直隆はベッドに腰掛け、じっと手を見つめていた。

後ろでは初音が寝息を立てている。涙の跡が数本残っていた。

この女を愛おしいと思う。本当に愛おしいと思う。

それでも。

それでも、直隆は歓喜を抑えきれない。

主の元へと帰れる。そして敗れると分かっている、強敵と戦えることが。

体が震えるほどの悦びだった。

己の全てを賭けて挑むあの高揚。

体内を駆け巡る血が沸騰し、殺戮を求めている。

だが、心の片隅では初音と共に過ごす、平和で美しい日々を欲しがっている。

どうしようもない矛盾は、直隆をいつまでも翻弄し続けていた。

止まない雨

雨の音は優しい、と初音は思う。
妙に静かで心にしみてくる。

昼下がり、窓辺から淡い光が正方形に床を照らし、雨の影がゆつくりとその中で動く。
初音は男の腕の中にいる。

ベッドの上で膝を立て、壁に身を預けている直隆の足の間にすっぽり身を沈めて、頬をむき出しの胸にぴとりとつけている。

二人とも無言だ。

ただただ、窓の外、不定期に開催される雨だれの演奏に耳を傾けている。
まるで世界から切り離されているようだ。

僅かに初音が身じろぎした時、直隆が口を開いた。

「一緒に過去へ行こう」

「うん」

「帰ってすぐに祝言を挙げる」

「素敵」

「わしと共に来い」

「行きたい」

そう言って初音は目を閉じた。

だけでも、自分は行かないだろう。もし、行くことができるとしても。

全てを捨てて、刹那を生きるには、しがらみが多すぎた。

もし、あたしが中学生や高校生くらいの純真があれば、一も二もなくこの人に付いてゆくことができるのに。

何もかも捨てて、直隆への愛を貫くことができるのに。

悲しいのは、直隆もそれを分かっていることだ。

直隆が腕に力を込めた時、初音が口を開いた。

「来年も上野の桜を見に行こう」

「ああ」

「来年も、再来年も、ずっとずっとその先も」

「勿論じゃ」

「お願い、どこにも行かないで」

「ここにおる」

そう言つて直隆は唇を落とした。

だけでも、自分は過去へと戻るだろう。

初音はここに留まるだろう。もし、来れるとしても。

現代へと来た当初、初音は「直隆がいつ死んだと分かれば、過去に戻ったことが分かるんじゃないだろうか」と言った。

あの時代で自分が死んだとなると、初音はどうなる。浅井家は滅亡する、安全の保証はない。犯され殺される可能性だつてあるのだ。

自分の死は怖くはないが、それは絶対的な恐怖だった。

直隆は生きるべき時代に帰る、切実にそれを望んでいる。

悲しいのは初音もそれに気が付いていることだ。

だから二人は優しい嘘を重ねる。

叶わない約束をする。

お互い、分かっていた。分かっていたが、それすらも欲しい時がある。

雨は降り続ける。柔らかく世界を包み込むように。

初音と直隆は、身動きもせずに抱き合つたままである。

居酒屋にて

それからの日々を初音はよくは覚えていない。

仕事を休むような真似はさすがにしなかったが、身が入ってなかったのも事実だった。

売り場にいるときは、とにかく早く帰りたくて帰りたくて、苦しかった。

駆けるように家に戻ると、今度は直隆と二人でいるのが苦痛を感じてしまう。

そして、縊るように逃げるように、体を重ねる。

焦燥と狂気を伴って。

何もかもどうでもよかった。ただ、暗闇に中を彷徨っているような、そのくせ何を求めているのかも分からない。

林田と明美の戸惑いも目に入らなかった。

そんな初音に活を入れたのは船橋である。

かつての上司は、ある日突然売り場にやってきて、

「お宅の店長、借りてくぜ」

と問答無用で初音を居酒屋に拉致したのだった。

「あの船橋さん。あたし、こんな所でこんな時間から、あなたと飲んでいる場合じゃないんですけど」

「悲しいことをいうじゃねえか、おい」

おしぼりで手と顔と、ついでに脇までふいた船橋は構うことなくビールを二つ注文した。

「林田からSOSがあつて行ってみりゃ、なーんだ、そのツラはやりすぎなんじゃねえの」

思わず初音は顔を撫でる。

これだから女は、と船橋は息を吐いた。

「店長の様子がおかしいんです。この前は慶事用の包装紙を巻いて

お客さんに渡そうとしていました。僕が気付いたから良かったものの、本当に最近おかしいんですってほとんど泣きそうな声で電話があったぞ。大方、男と悶着でもあったんだろうが、しっかりせんか、この馬鹿者」

「すみません……」

「人間だからしょうがねえとは思うがな。仕事にプライベートは持ち込むな。俺たちは働いて会社の利益を上げる。会社は見返りに俺たちに給料を払う。しかもお前は責任者だ、部下に心配かけてどうする」

「はい……」

ふん、と鼻を鳴らすと船橋は注文したつまみをずいと初音に押しやった。

「食え。とにかく食え。お前、まともに食っとらんだろう」

「はい」

食欲はさっぱりなかったが、あえて箸を取る。

「なあ、木村」

「なんですか」

ししやもをほおばっていた船橋が顔を上げた。

「俺はな、今までずっと女が男の土俵に上がってくるんじゃないかって思っていたよ」

「はあ」

「中途半端に三、四年仕事をして、やっと使いもんになれたところで、結婚だ、自分探した、留学だとかいって辞めていく。女は気楽でいいね、逃げる場所があつて。結局は親や旦那に依存して生きていけるもんな」

「それは」

「まあ、聞け。それが幸せってもんなだろう。時代が変わったからって世間はそうそう変わらねえ。お前も親に仕事辞めろ、結婚して早く孫の顔を見せろとせつつかれているクチだろう」

「はあ、まあ」

「お前はよくやっているよ。逃げずにあの日本橋山中屋で頑張っているよ。本社も評価している。だからな、木村」

「ししゃもはきれいになくなり、船橋は今度はから揚げに箸を伸ばした。」

「あそこが無くなっても、本社はお前を離さねえよ。多分、またどこかの売り場に配属になるだろうさ。そして、お前ならどこにいつでも成果を出してくれると期待してるんだ。その期待にこたえるのが、お前の役目だ」

「……」

「もし、うちが潰れてもお前ならどこでもやっていけるさ。人間、一番大事なのは根性だからな」

「船橋さん」

「ああ？」

「ありがとうございます。……わたし、甘えていました」

初音は涙が出てきそうになり、身を震わせた。

心配してくれる人がいる。必要としてくれる仕事がある。

店長会で会う以外、連絡もとっていない船橋が、わざわざ初音を連れ出してくれた。

説教をしてくれた。

あたしは、酔っていただけではないのか。

大切な人が死ぬ、もうすぐ目の前から消える。そんな不幸にただ酔って、自分がなすべきことを放棄していたのではないか。

あたしはそんな女が腐ったような女じゃない。

一息ついて、初音は顔を上げた。

「まあ、食えよ。言っとくがおごりじゃねえぞ、次は倍返しで出してもらうつからな」

「はい」

照れくさそうに船橋はそっぽを向いた。初音は冷奴に箸を伸ばす。

直隆は大事。でも仕事も大事。
やるべきことはしっかり果たして、これからの直隆との僅かな時間
も大切にしよう。

だが、別れはあっけなく来た。
思ったよりも早く。

帰宅した初音を待っていたのは、無人の室内だった。

覚悟をしていたものの、喪失は思ったよりもひどかった。

さようならくらい、言いたかったよ。

誰もいない部屋の真ん中で、初音は声を上げて泣いた。

彼方からの

季節は移ろい、太陽が主張し始める時期に差し掛かった。

林田博は研究室でダラダラと、友人らとくだらない馬鹿話をしていく。

「このご時世にクーラーない部屋なんてありえへんよな」

「扇風機だけは四台もあんのになあ」

「熱風しかこんぞ、誰か自治体に掛けあえや」

「あれ、本当に存在してるんスかね。秘密結社だったりして」

「梅木が……」

だらしなくもたれた椅子（古くてきしむ）から、身を乗り出した時、ケータイが鳴った。

「あ、木村さん」

こんにちは、とケータイの向こうで声がした。

「お久しぶりですね。新しい職場には慣れました？」

弟から売り場が日本橋山中屋から撤退したことは聞いている。今は健二は名古屋にあり、木村初音は銀座の店舗で働いている。

「おかげさまで。バタバタしていて、お礼が遅くなつてすみません」
林田さんさえよければ、ちゃんとあつて改めて礼が言いたい、と初音は続けた。ついでに滋賀に行くとも。

「直隆の命日に、姉川へ行こうと思うんです」

「よければ同行さしてもらえませんか。あそこは車で行かんと結構不便ですよ」

もう一つ。直隆ゆかりの恩念寺に連れて行きたかった。引っ掛かりは今でも胸の内ですづっている。だが断れれば、もう関与しないつもりだった。

「参ります」

初音は即答した。

「じゃあ……三十日の十二時にＪＲ京都駅で……。はい、はい、…

…失礼します。…なんやのお前ら」

最後は友人らに向かって発せられた言葉である。

じーっと博の会話を聞いていた彼らは、

「んま、聞きました？ 奥さま」

「女と電話してましたざますよ」

「アタシたちを敵に回したわね」

「公開処刑にいたしましたようか」

恨みと妬みを込めて、ひそひそと不穏な相談を始めた。

いや、それよりも梅木だ。

「君の瞳は百万ボルト」

といってやりたいほどランランと目を輝かせて博を見つめていたのだった。

「最低」

正晴はオフィスの窓辺から街を見下ろしながら、悪態をついた。

ジョージア州首都アトランタは緑の中に高層ビルが点在する。ここ

から見える景色を正晴は気に入っていた。

「だから言っただじゃないか。未来の見えない相手はやめとけって」

久しぶりに初音に電話をした。例の恋人を聞いたところ、「帰るべ

き所に帰ったの。でもあたしは大丈夫だから」とさりとした返答がきた。

「未来は見えなくても、続いていくものでしょう」

その声には暗さの微塵もない。

「姉ちゃん、実はつらいくせに」

つらい時ほど「大丈夫」を繰り返すことを、初音は気が付いているんだろうか。

だけど、受話器の向こうから聞こえる声は、本当に「大丈夫」そうで何だか安心するような、信頼に足るようにも感じた。

「つらくないといったら嘘になるけどね」

声のトーンは変わらない。

ああ、そうか。

あの男は姉を強い、と言った。そこが堪らなく愛らしいと。初音は強い。

身を纏う鎧が消えても、凜としてそこに立ち続ける。

理不尽な現実には打ちのめされても、必ず起き上がる。

「ね、正晴」

姉の声は遠く海の彼方から電波に乗って、正晴の耳に届く。柔らかく、それでいて揺るぎない声。

「あの人は最後に最高のものをくれたの」

再び関西へ

久しぶりに再会した木村初音は、最初見た頃を感じた頑なさは無く、なんだか丸くなったような雰囲気だった。

サッカー生地のふんわりしたワンピースを上品に着こなしている。

「お元気でしたか」

「はい。林田さんもお変わりなく」

そして梅木に気が付いたようだ。

「おれの後輩ですねん。どうしてもって言^ゆうんで連れてきました」梅木はネクラ引きこもり学者を自称するほどだから、女に免疫がない。初音に会うまでのしやぎようはどこへやら、今やむつつりと黙りこくつてまるで石である。

挨拶が済んだ所で、三人は車に乗り込んだ。そして道すがらこれまでの経緯を聞いたのだった。

「あのチビが普通サイズになったんか。驚かはったでしょう」

博はハンドルを握っている。横の助手席には初音が、後ろには梅木が石状態で座っている。

「いえ、もう突然変異で。夜中だったから不審者が忍び込んできたのかと勘違いしちゃって」

笑いながら煙草の火をつけようとした時。それまで和やかだった初音がぎろりと睨んだ。

わしの横でなに吸おうとしとるんじゃボケ。

そう声が聞こえた（気がした。後で博は「あれはマジで怖かった。小便ちびるか思うくらいに怖かった」と梅木に告白している）。

喫煙者はいつでもどこでも非喫煙者に弱いものである。仕方なしにそっと煙草をしまった。

「あの、すみません」

石化の呪縛から解放されたらしい梅木が後ろから声を出す。

「木村さんはどうして、松本四朗直隆を知っているんスか。専門の
ぼくでさえ知らなかった名前やのに」

「タイムスリップして家に来たんです。しかも20cmくらいのち
つちな体で」

歌うように初音が答えた。

「チビのくせに、プライドが高くて。そのくせ現代の一人に感嘆す
るような素直な人でした。あたしは直隆が好きだった。ちっちゃく
ても、原寸大に大きくなっても、大好きだったんです。でも、あの
人はお侍さんだった」

流れゆく窓の外を見ながら、初音は小さく息を継いだ。

「直隆がやってきてしばらく、どうすれば過去に戻るかを考えてい
た時に、彼が死んだ文献が何かがあれば、間違いなくその時代に戻
れたことになるんじゃないかと思いつきました。なのでつてを頼つ
て林田さんをお願いしたんです」

「おれの弟がこの人の部下やから」

梅木は話を聞いてゆくうちに、今度は石から暗黒化を始めた。

おお。銀河鉄道999の車掌さんが後部座席にいらっしやるよ。

バックミラーでちらりと確認したものの、突っ込む気にもなれなく
て、博は運転に集中する。

事前に連絡を受けていた恩念寺の住職は、わざわざ門前まで出迎え
てくれた。

「木村初音さんですな」

ニコニコと笑みを浮かべて、坊主は続ける。

「長い間、ずっとお待ちしておりました。どうぞこちらへ」

初音は戸惑ったままである。梅木は車掌状態で目だけを百万ボルトに光らせている。

そして博は、己の行動が正解だったことに満足した。

イグサの香りがする和室の一室に通すと、住職は大事そうに漆塗りの箱から、一通の手紙を取り出した。

黄色く変色しており、ところどころ小さな穴があいている。

「これを預かったのは木圭という坊主です」

初音の前に、その蛇腹式の文を置くと居住まいを正す。

「まだ小坊主だった頃、村人に暴力をふるわれていた所を松本直隆に助けられたそうです」

「あっ！」

声を上げたのは初音だった。

「もしかして、お供えをつまみぐいして乱暴されていたのではないですか」

「御存知でしたか」

博たちは話が見えない。が、黙って聞いていた。

「合戦の二日前。その木圭のもとに、神隠しにあっていた松本直隆が馬でやってきまして」

頼みがある、と直隆は言った。

「遠い未来、木村初音という女が訪ねてきたら、渡してくれぬか」

木圭は手紙を受け取った。

「御文ですか」

その時、直隆は少年にも眩しい笑顔でこう答えたという。

「恋文じゃ」

「……その遠い未来というのが、いつだか分からなんだ。そして手紙は代々この寺に伝わり、松本の菩提と共に守られるようになった」
住職はそこでいったん口を切り、茶をすすった。

「わしらはこんな商売をしておるもんで、縁、というものを信じる。」

だから、きつとこの手紙を受け取る方が訪ねてこられると信じておった。これで肩の荷が降りましたわい」

さ、と丸い手を初音に向けた。

「どうぞ、お開け下され」

初音は慎重に手紙を開いた。その手が震えている。

長い時間をかけやつと開き、流れる毛筆を追っていた黒い瞳が、動揺に揺れた。

「木村さん。なんて書いてあるんです」

痺れを切らした博が聞いた。

「どうしよう、林田さん」

蒼白になった初音が縋るように、博に目を向けた。

「達筆すぎてなんて書いてあるか分からない……」

ラブレター

「木村初音殿

思っていることを伝えようと筆を取ってはみたが、難しいものだな、中々手が動いてくれぬ。

礼の一つも言えぬまま、分かれてしまったことだけが悔やまれる。あの日。

わしは再び光に包まれて、気が付いたら小谷の山中に倒れておった。この髪が短くなったことも、着物でなく服を着ておったことも、周囲にはどうでもいいことだった。それどころではなかった。

現在はそれぞれに陣を構え、ほどなく大戦が始まるだろう。

わしらの中に反対をする者はもういなかった。御館様だからこそ、

あの方だからこそ、全てを捧げる覚悟にある。

未来を知っているわしは、何も言えなかった。

なあ、初音。

わしは怖かった。

そなたのいる未来が歪んでしまうことが怖かった。愛する者が住む、あの美しい世界がもしかしたら消えてしまうことが恐怖だった。

流れに沿っていれば、いずれそなたがいる世界が誕生する。

なぜ、未来に飛んだのかは分からない。そなたの元へと行ったのかも分からないし、最初の内は小さな体だったのかも分からない。

分かっていることは、ただ一つ。

そなたが横にいたからこそ、世界は美しく輝いて見えた。

初音。雄々しく生きよ。

そしていつまでも、びゅーちふるな世界で笑って過ごしてほしい。それだけがわしの願いだ」

晴れた日が続いたためか、姉川は拍子抜けするほど小さな小川だった。

車を降りて川原に出た博の横には、初音がいる。

翻訳しつつも手紙を読み上げる梅木の声に、初音は静かに涙を流しただけだった。

「形見くらい、残しておけばよかったのに」

沈黙に耐えられなくなって、博はちやかすように言った。

丁度440年前、松本四朗直隆はこの地のどこかで命を落とした。

「形見ならあります」

初音はそう言って、そっと腹を抑えた。
そつか。それで煙草を嫌ったのか。

「産むんですか」

「産みます」

彼方を見つめながら、初音は微笑んだ。

生涯、博が忘れることできなかったほどの、強く優しい笑みだった。

エピソード

風が吹いて、花びらが散る。

辺りは一瞬にして桃色に染まった。

「うわぁー!」

小さな手は初音を振り切って、歓声を上げて走り出す。

「こら、走ったら転ぶでしょう」

聞く耳を持たず、我が子は両手を上げて桜並木に駆け寄った。

絶え間なく降り散る桃色の破片を捕まえるように、踊るようにたらを踏んでいる。

「きれいだねえー」

美しいのう。

声が重なる。

いつかの記憶、いつかの風景。

「ねえ、ママ。知ってる?」

なあ、初音。知っておるか。

「きれい、はえーごでびゅーていふるってゆうんだよ」

美しい、はえーごでびゅーちふるといふのじゃぞ。

「へえ、知らなかった。直隆は物知りだね」

へへん、と直隆は得意げに顎を上げた。そして甘えるように初音に向かつて走ってくる。

抱き上げると子供特有の日向のにおいがした。

「さて、チビ。そろそろお家に帰ろうか」

「チビ言うなー！」

すっと降りた子供の小さな手を取って歩き出す。

この手はいつか離れてゆくけれど。

あなたのお父さんと同じように、あたしに美しい世界を見せてくれる。

初音はゆっくりと微笑んだ。

世界はとってもビューティフル。

エピローグ（後書き）

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

お気に入りに登録してくださった方、評価下さった方、感想下さった方、厚く御礼申し上げます。

未熟な部分も多々ありますが、それでも読んでくださった方の心のどこかに引っかけられてもらえれば、これ以上の喜びはありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6621o/>

ビューティフル

2011年5月15日07時47分発行